

# 主要地方道成田松尾線 XVI

—芝山町大里所在馬土手・宝馬遺跡93-77地点—

平成15年3月

千葉県土木部

財団法人 千葉県文化財センター

# 主要地方道成田松尾線 XVI

しばやま おおさとしよざいうま ど て ほうま  
—芝山町大里所在馬土手・宝馬遺跡93-77地点—





## 序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

この度、千葉県文化財センター調査報告書第455集として、千葉県土木部の主要地方道成田松尾線道路改良事業に伴って実施した山武郡芝山町大里所在馬土手、宝馬遺跡93-77地点の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

特に宝馬遺跡93-77地点では、旧石器時代の集中地点が2か所検出されるなど旧石器時代を中心とした中・近世に至る各時代の遺物が出土しており、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られています。この報告書が、学術資料として、また埋蔵文化財の保護と理解のための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し、御指導、御協力いただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成15年3月25日

財団法人千葉県文化財センター  
理事長 清水 新 次

## 凡 例

- 1 本書は、主要地方道成田松尾線道路改良事業（芝山地区）に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書は、下記の遺跡を収録したものである。  
大里所在馬土手 山武郡芝山町大里字柳谷32-9ほか（遺跡コード 409-039）  
宝馬遺跡93-77地点 山武郡芝山町字宝馬93-77ほか（遺跡コード 409-035-3）
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県土木部の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆は第1章、第2章、第4章は成田調査室長 西口徹、第3章は上席研究員 遠藤治雄が担当し、編集については成田調査室長 西口徹が担当した。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化財課、千葉県土木部、芝山町教育委員会、空港調査室研究員 永塚俊司氏ほか多くの方々から御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。  
第2図 芝山町役所発行 1/2,500都市計画図「芝山5, 6, 9, 10」（大里所在馬土手）  
第7図 芝山町役場発行 1/2,500都市計画図「芝山17」を基に加筆を行った。（宝馬遺跡93-77地点）  
第1図 国土地理院発行 1/25,000地形図「多古（NI-54-19-10-2）」
- 8 周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による昭和55年、平成12年撮影のものを使用した。
- 9 基準点測量及び地形測量は日本測地系に基づいて行われた。
- 10 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。
- 11 挿図に使用したスクリーンとーン及び記号は、図版中に記載している。

# 本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の概要	1
第2節 調査の方法	1
第3節 遺跡の位置と周辺の遺跡	3
第2章 大里所在馬土手	5
第1節 縄文時代	5
1 概要	5
2 馬土手覆土内出土遺物	5
第2節 中・近世	5
1 概要	5
2 遺構と遺物	5
(1) 馬土手	5
(2) 柵列	12
第3章 宝馬遺跡93-77地点	13
第1節 旧石器時代	13
1 調査区の土層説明	13
2 概要	13
3 第1石器集中地点出土遺物	17
4 第2石器集中地点出土遺物	23
第2節 縄文時代	28
1 概要	28
2 遺物	28
第3節 古墳時代～中・近世	28
1 概要	28
2 遺物	28
第4章 まとめ	30
第1節 大里所在馬土手	30
第2節 宝馬遺跡93-77地点	30
報告書抄録	巻末

## 挿 図 目 次

第1図	グリッド配置図……………	1	第12図	宝馬遺跡93-77地点旧石器時代第1地点 遺物出土状況図……………	18
第2図	遺跡の位置と周辺の遺跡……………	2	第13図	宝馬遺跡93-77地点旧石器時代第1地点 石材別出土状況図……………	19
第3図	大里所在馬土手周辺地形図……………	6	第14図	宝馬遺跡93-77地点旧石器時代第1地点 出土遺物実測図1……………	20
第4図	大里所在馬土手出土遺物実測図……………	7	第15図	宝馬遺跡93-77地点旧石器時代第1地点 出土遺物実測図2……………	21
第5図	大里所在馬土手A区～B区全測図及びト レンチ配置図、セクション図及び柵列出 土状況図……………	8	第16図	宝馬遺跡93-77地点旧石器時代第2地点 遺物出土状況図……………	24
第6図	大里所在馬土手B区～C区全測図及びト レンチ配置図、セクション図及び柵列出 土状況図……………	10	第17図	宝馬遺跡93-77地点旧石器時代第2地点 石材別出土状況図……………	25
第7図	大里所在馬土手D区～E区全測図及びト レンチ配置図、セクション図……………	12	第18図	宝馬遺跡93-77地点旧石器時代第2地点 出土遺物実測図……………	26
第8図	7B-77区土層断面図……………	13	第19図	宝馬遺跡93-77地点縄文時代包含層出土 遺物実測図……………	26
第9図	宝馬遺跡93-77地点周辺地形図……………	14	第20図	宝馬遺跡93-77地点古墳時代～中・近世 出土遺物実測図……………	29
第10図	宝馬遺跡93-77地点上層確認トレンチ配 置図……………	15			
第11図	宝馬遺跡93-77地点下層確認グリッド配 置及び本調査範囲図……………	16			

## 表 目 次

第1表	宝馬遺跡93-77地点旧石器時代第1地点 石器観察表……………	27	第2表	宝馬遺跡93-77地点旧石器時代第2地点 石器観察表……………	27
-----	------------------------------------	----	-----	------------------------------------	----

## 図 版 目 次

図版1	大里所在馬土手周辺航空写真 1万分の1 (昭和55年度)	図版4	馬土手C区全景, 馬土手C区トレンチセク ション, 馬土手B-1拡張区内出土柵列
図版2	馬土手A区全景, 馬土手A区トレンチセク ション, 馬土手A区トレンチ内出土柵列	図版5	馬土手D区全景, 馬土手D区トレンチセク ション
図版3	馬土手B区全景, 馬土手B区トレンチセク ション, 馬土手A-2拡張区内出土柵列	図版6	馬土手E区全景, 馬土手E区トレンチセク ション

- |      |                                     |   |
|------|-------------------------------------|---|
| 図版 7 | 大里所在馬土手出土遺物，宝馬遺跡93-77<br>地点出土遺物     | 遺物集中第1地点土層断面（西側），遺物集<br>集中第1地点尖頭器出土状況                               |
| 図版 8 | 宝馬遺跡93-77地点周辺航空写真 1万分<br>の1（昭和55年度） | 図版12 遺物集中第2地点出土状況（南から），遺<br>物集中第2地点土層断面（西側），遺物集<br>集中第2地点縄文時代石鏃出土状況 |
| 図版 9 | 遺跡遠景，確認調査状況，本調査状況                   |   |
| 図版10 | 7C区確認トレンチ，9D区確認トレンチ，9D<br>区土層断面     | 図版13 旧石器時代 遺物集中第1地点出土石器   |
| 図版11 | 遺物集中第1地点出土状況（南から），遺                 | 図版14 旧石器時代 遺物集中第1，2地点出土石器   |

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査の概要

主要地方道成田松尾線は、新東京国際空港開設に伴う交通量の増大に対処するため、空港南側の山武郡芝山町大里と九十九里浜沿岸とを結ぶ道路改良事業である。工事にあたり事業区域内に所在する埋蔵文化財の有無と取扱いについて、千葉県教育委員会に照会した結果、当該事業地内には埋蔵文化財が所在することが判明した。その取扱いについて関係諸機関と協議した結果、事業計画の変更は困難なため記録保存の措置を講ずることとなり、財団法人千葉県文化財センターが昭和52年12月より、発掘調査を実施し、報告書を刊行している<sup>1)</sup>。

今回報告する大里所在馬土手及び宝馬遺跡93-77地点における調査の経過及び担当は、下記のとおりである。なお、大里所在馬土手の発掘調査は前半（千代田1-公共分）、後半（千代田2-県単分）に分けて行われた。

平成14年度

発掘調査 大里所在馬土手（千代田1-公共分）（9月2日～9月13日まで）上層本調査

大里所在馬土手（千代田2-県単分）（9月17日～9月30日まで）上層本調査

東部調査事務所長 折原繁，成田調査室長 西口徹

宝馬遺跡93-77地点（2月3日～2月28日まで）上下層確認調査，下層本調査

東部調査事務所長 折原繁，上席研究員 遠藤治雄

整理作業 大里所在馬土手（3月3日～3月31日まで）水洗・注記から報告書刊行まで

東部調査事務所長 折原繁，成田調査室長 西口徹

宝馬遺跡93-77地点（3月3日～3月31日まで）水洗・注記から報告書刊行まで

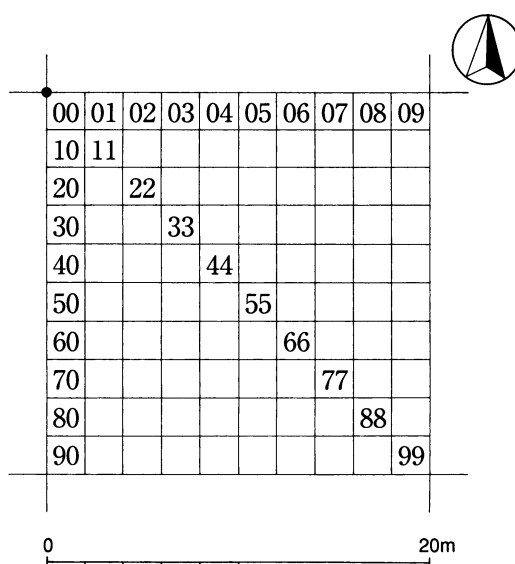
東部調査事務所長 折原繁，上席研究員 遠藤治雄

## 第2節 調査の方法

今回の事業区域は、大里所在馬土手を対象とした部分と宝馬遺跡93-77地点である。

大里所在馬土手では、規模250m、1,250㎡の馬土手を対象に本調査が行われた。その結果、中・近世の馬土手1条、柵列1条が確認された（第5～7図）。

宝馬遺跡93-77地点では、規模1,899.84㎡の中で上層確認調査を10%行った。調査区の中に2m×10mのトレンチを設定し（第9図）、遺構等の確認を行った。その結果上層の本調査は遺構が確認されなかったため引き続いて下層確認調査を行った。18か所に2m×2mのグリッドを設定し（第10図）、遺物が2か所で検出されたため本調査に移行し



第1図 グリッド配置図





第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡



530㎡の本調査を行った。その結果2か所で68点の石器等が確認された。なお、調査を実施するにあたり、大里所在馬土手の対象範囲全域に、公共座標に合わせて通常のグリッドの設定は行わず、馬土手に沿って任意の公共座標杭を起点に数十m毎に残りの良い地点を選び、幅2mの土層観察のためのセクショントレンチをA～Eトレンチまで設定して調査を行った。またAトレンチで判明した柵列についての追跡調査のため2m幅の拡張区を馬土手に沿って可能な範囲で設定し検出作業を行った。馬土手の測量については調査対象全域を1/200で地形測量を行った。(第4～6図)。

宝馬遺跡93-77地点の対象範囲全域には、公共座標に合わせて東西南北に20m×20mの方眼網を設定し、大グリッドとした。大グリッドの呼称法は、北西に起点を置いて、北から南に1, 2, 3……とし、西から東へA, B, C……として、これを組み合わせて使用した。大グリッド内には2m×2mに100分割の小グリッドを設定し、北西隅を起点に01, 02, 03……として南西隅を99とする。グリッド名はこれにより、大グリッドと小グリッドを組み合わせて、B8-34のように表示することにした(第1図)。

### 第3節 遺跡の位置と周辺の遺跡(第2図)

大里所在馬土手は、山武郡芝山町字柳谷32-9ほかに所在する(第3図)。その立地は、現在新東京国際空港が建設されている、成田市と芝山町の市境周辺の水源として南流する高谷川の水源近くの台地上に位置する。標高43mの南側の谷を巻くように約2mの高さ、幅2～3m、南西方向から弧状に南東方向に向かって約250mにわたって残されている。成田松尾線の事業地内での最北部に位置し、成田松尾線と国道296号線との合流部分にあたる。なお、交差点部分については馬土手部分を含めて柳谷遺跡<sup>2)</sup>で調査を行っている。なお、道路を隔ててさらに西側には一連の馬土手の未調査の部分が続いている。

周辺の遺跡では隣接して柳谷遺跡、やや南側に井森戸遺跡<sup>3)</sup>や上宿遺跡<sup>4)</sup>などの調査例がある。これらの遺跡は成田松尾線で調査されただけでなく、空港南部工業団地造成事業や新東京国際空港建設に伴う事業等でも調査が進められており、その成果の一部はすでに報告されている<sup>5)</sup>。

山田宝馬遺跡93-77地点は、山武郡芝山町宝馬字宝馬93-77ほかに所在する(第8図)。標高42mの台地上の中央付近にあり、今回の調査区では旧石器時代の石器群が2か所検出されている。宝馬遺跡は過去の調査で2回調査を行い、すでに報告<sup>6)</sup>されている。

周辺の遺跡では北側に沖ノ台Ⅰ遺跡、沖ノ台Ⅱ遺跡<sup>7)</sup>、深田台遺跡<sup>8)</sup>がある。沖ノ台Ⅰ、Ⅱ遺跡では古墳時代後期以降の製鉄関連の遺構、遺物が多数検出され非常に注目される。南側では新山遺跡<sup>9)</sup>、出口向遺跡<sup>10)</sup>などが調査されている。

注1 以下の15冊の報告書が刊行されている。

萬崎博昭ほか 昭和58年 『主要地方道成田松尾線Ⅰ 小池麻生遺跡 小池向台遺跡』(財)千葉県文化財センター

高橋賢一ほか 昭和60年 『主要地方道成田松尾線Ⅱ 小池新林遺跡 小池地藏遺跡』(財)千葉県文化財センター

萬崎博昭ほか 昭和61年 『主要地方道成田松尾線Ⅲ 鯉ヶ窪遺跡 中台柿谷遺跡 遠山天之作遺跡』(財)千葉県文化財センター

伊藤智樹ほか 昭和61年 『主要地方道成田松尾線Ⅳ 小池元高田遺跡 柳谷遺跡 上宿遺跡 井森戸遺跡』(財)千葉県文化財センター



- 宮重行ほか 昭和62年 『主要地方道成田松尾線Ⅴ 中台貝塚 松尾東雲遺跡 八田太田台遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 渡邊高広ほか 平成3年 『主要地方道成田松尾線Ⅵ 芝山町小池地蔵Ⅱ遺跡 宮門遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 渡邊高広 平成4年 『主要地方道成田松尾線Ⅶ 芝山町御田台遺跡 小池新林遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 石塚浩 平成10年 『主要地方道成田松尾線Ⅷ 松尾町名城遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 香取正彦ほか 平成10年 『主要地方道成田松尾線Ⅸ 大台西藤ヶ作遺跡 大堀切遺跡 洞谷台遺跡 深田台遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 石倉亮治ほか 平成11年 『主要地方道成田松尾線Ⅹ 芝山町浅間台遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 石倉亮治ほか 平成11年 『主要地方道成田松尾線ⅩⅠ 芝山町山田宝馬古墳群』(財)千葉県文化財センター
- 西口徹 平成12年 『主要地方道成田松尾線ⅩⅡ 芝山町新山遺跡43-9地点 宝馬遺跡1709-37地点』(財)千葉県文化財センター
- 遠藤治雄 平成13年 『主要地方道成田松尾線ⅩⅢ 芝山町新山遺跡43-10地点 宝馬遺跡93-204遺跡 出口向遺跡210地点』(財)千葉県文化財センター
- 西口徹ほか 平成13年 『主要地方道成田松尾線ⅩⅣ 芝山町沖ノ台Ⅰ遺跡 沖ノ台Ⅱ遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 西口徹 平成13年 『主要地方道成田松尾線ⅩⅤ 芝山町向台遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 2 伊藤智樹ほか 昭和61年 『主要地方道成田松尾線Ⅳ 小池元高田遺跡 柳谷遺跡 上宿遺跡 井森戸遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 今回の調査区の西側部分にあたり、成田松尾線の北側最先端の取り付け部分にあたる。
- 3 伊藤智樹ほか 昭和61年 『主要地方道成田松尾線Ⅳ 小池元高田遺跡 柳谷遺跡 上宿遺跡 井森戸遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 他に、平成14年度に空港南部工業団地造成事業及び整備地区南側貨物取扱施設造成事業に伴う埋蔵文化財調査が行われた。
- 4 伊藤智樹ほか 昭和61年 『主要地方道成田松尾線Ⅳ 小池元高田遺跡 柳谷遺跡 上宿遺跡 井森戸遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 鳴田浩司ほか 平成10年 『空港南部工業団地埋蔵文化財調査報告書2 山武郡芝山町上宿遺跡 大堀切遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 他に、平成12年度に空港南部工業団地造成事業に伴う埋蔵文化財調査が行われた。
- 5 注3、注4に同じ
- 6 西口徹 平成12年 『主要地方道成田松尾線ⅩⅡ 芝山町新山遺跡43-9地点 宝馬遺跡1709-37地点』(財)千葉県文化財センター
- 遠藤治雄 平成13年 『主要地方道成田松尾線ⅩⅢ 芝山町新山遺跡43-10地点 宝馬遺跡93-204遺跡 出口向遺跡210地点』(財)千葉県文化財センター
- 7 西口徹ほか 平成13年 『主要地方道成田松尾線ⅩⅣ 芝山町沖ノ台Ⅰ遺跡 沖ノ台Ⅱ遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 8 香取正彦ほか 平成10年 『主要地方道成田松尾線Ⅸ 大台西藤ヶ作遺跡 大堀切遺跡 洞谷台遺跡 深田台遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 9 西口徹 平成12年 『主要地方道成田松尾線ⅩⅡ 芝山町新山遺跡43-9地点 宝馬遺跡1709-37地点』(財)千葉県文化財センター
- 遠藤治雄 平成13年 『主要地方道成田松尾線ⅩⅢ 芝山町新山遺跡43-10地点 宝馬遺跡93-204遺跡 出口向遺跡210地点』(財)千葉県文化財センター
- 10 遠藤治雄 平成13年 『主要地方道成田松尾線ⅩⅢ 芝山町新山遺跡43-10地点 宝馬遺跡 93-204遺跡 出口向遺跡210地点』(財)千葉県文化財センター

## 第2章 大里所在馬土手

### 第1節 縄文時代

#### 1 概要

今回の調査対象は馬土手であるため、遺構に伴って検出されたものではなく、馬土手部分の覆土内に混入したものである。下記で掲載のとおり縄文時代の土器片2点、石鏃が1点検出された。柳谷遺跡の包含層の土器片の一部と思われる。

#### 2 馬土手覆土内出土遺物（第4図1～3）

1～2は撚糸文が一部見られる土器片で縄文時代早期のものと思われる。3は乳白色に近い色調の珪質頁岩製の石鏃で身の部分が一部欠損している。小剥片をやや大きめの調整で仕上げている。基部の抉りのあまりない左右に大きく開く五角形に近い形状である。全長2.9cm，幅2.2cm，厚み0.4cm，重量3.7gである。

### 第2節 中・近世

#### 1 概要（第3図）

今回は馬土手250mを対象にした調査のため馬土手の測量及び5か所の2m幅のセクション観察のためのトレンチA～E区を設定して行った。その際2か所で並行する柵列が検出されたため補助的に確認のためのトレンチを設定した。それぞれ○区-1～2拡張区として柵列の有無を確認した。その結果、柳谷遺跡でも見られていたと同様に南側に土手の付属施設としての柵列が見られることが今回の調査でも明らかにされた。

#### 2 遺構と遺物

##### (1) 馬土手

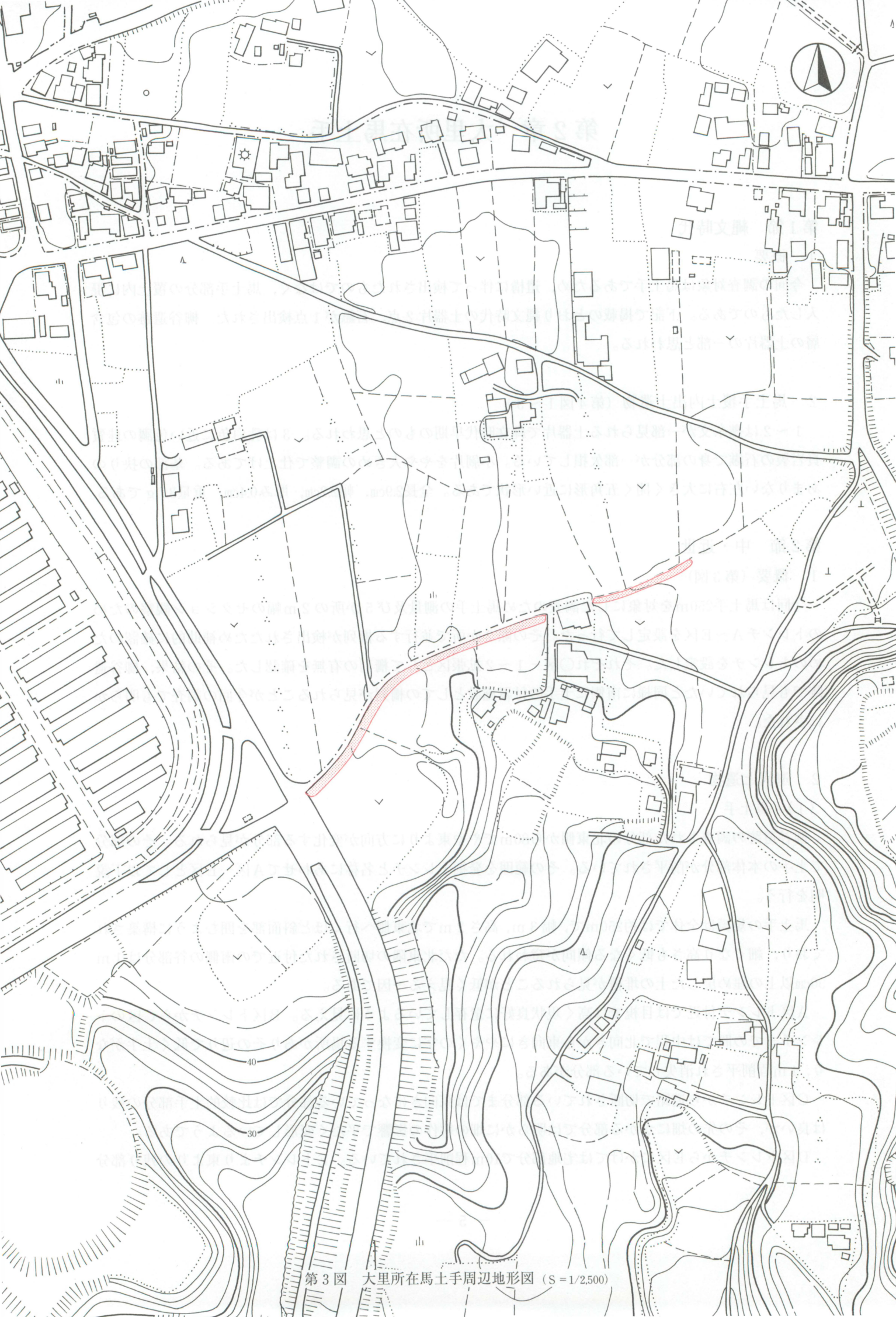
柳谷遺跡の調査された部分の北東側から80mでやや東よりに方向が変化する部分が見られる。その部分で土手の本体部分が削平されている。その範囲を発掘トレンチと名称にあわせてA区～E区として以下説明を行う。

馬土手の規模は全体では約250mで、幅3m，高さ2mで北東側へ行くほど斜面部を囲むように構築されており、細くなり高さも低くなる傾向が窺われる。ただ北東隅の切断された付近での南側の谷部分は1m50cm以上の埋め戻した土の堆積が見られることが低く見える一因である。

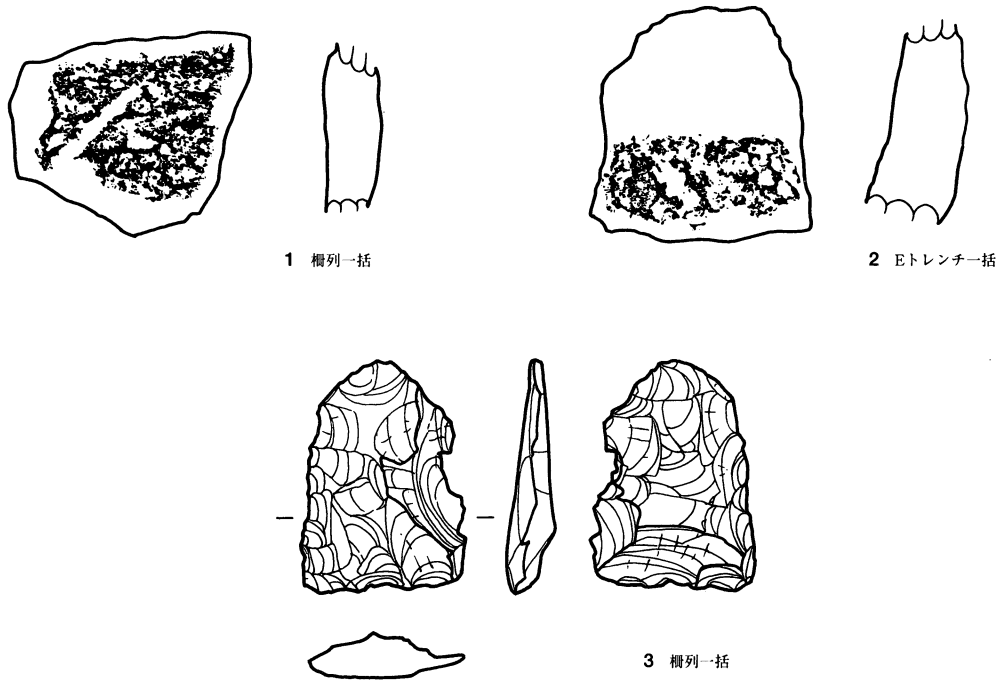
A区トレンチ付近では目視では高く現状良好に遺存しているように見える。B区トレンチからC区トレンチまでの間では中程で北向きから東向きにややくの字に変換する場所がありその辺りで低く土手がなり、4m程削平され消失している部分がある。

C区トレンチから道路で切断されている部分までは東向きになっている部分では比較的土手部分の残りは良いが、その先の畑にかかる部分では明らかに畑の耕作の影響で平たく変形しているようである。

D区トレンチからE区にかけては宅地部分で10m程削平されている。Eトレンチより東よりの残り部分



第3圖 大里所在馬土手周辺地形圖 (S = 1/2,500)



第4図 大里所在馬土手出土遺物実測図 (1/1)

は裾をやや広げ気味にして消失している。その先は赤道のある方向に伸びていっていたものと思われる。

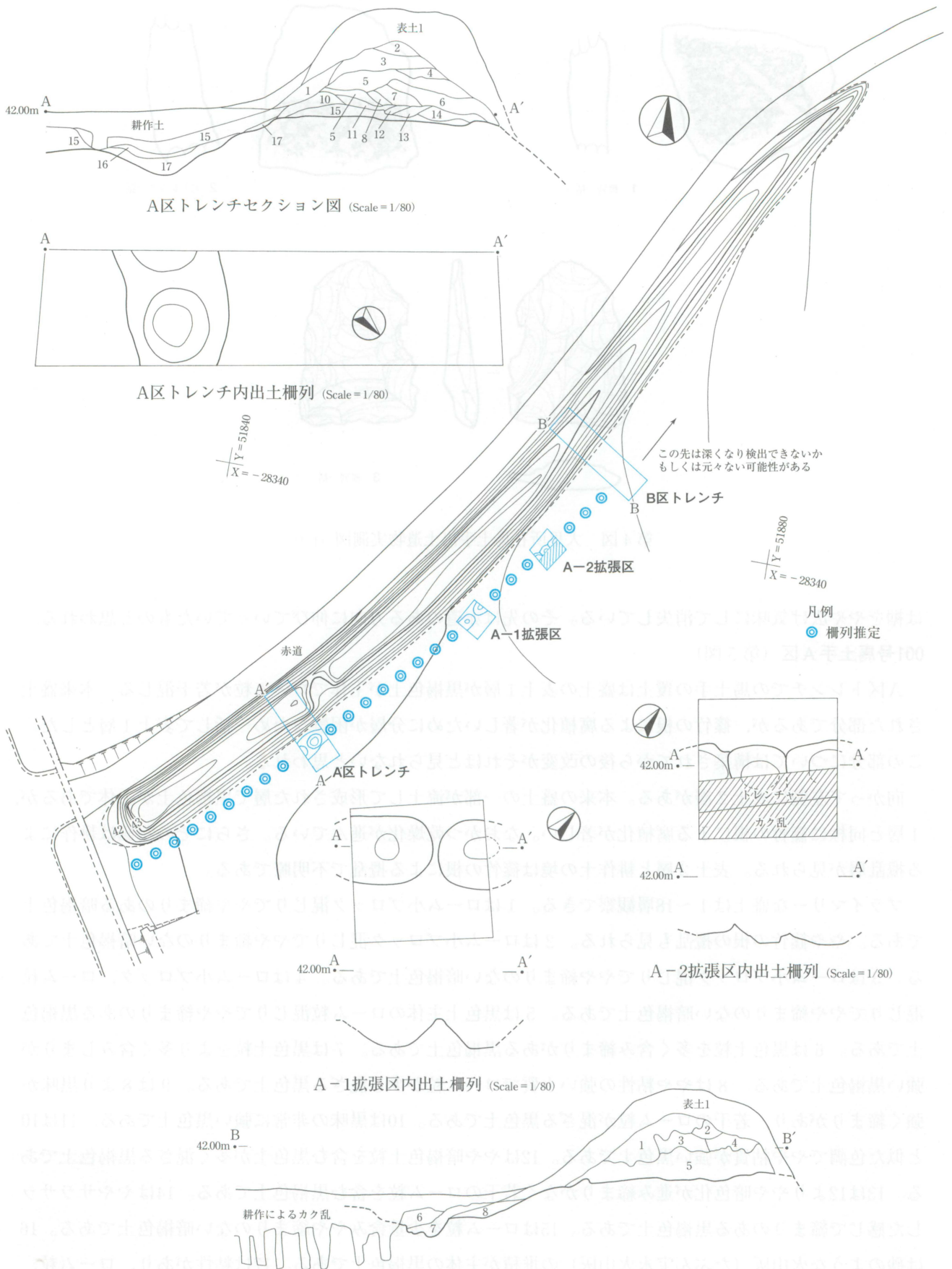
#### 001号馬土手A区 (第5図)

A区トレンチでの馬土手の覆土は盛土の表土1層が黒褐色土が主体でローム粒が若干混じる。本来盛土された部分であるが、篠竹の根による腐植化が著しいために分層が困難なため一括して表土1層とした。この部分については構築されてからの改変がそれほど見られないと思われる。

向かって左側に表土2層がある。本来の盛土の一部が流土して形成された層で黒褐色土が主体であるが、1層と同様に篠竹の根による腐植化が著しい。なおかつ乾燥化が進んでいる。さらにその左側は耕作による攪乱層が見られる。表土2層と耕作土の境は篠竹の根による攪乱で不明瞭である。

プライマリーな盛土は1～18層観察できる。1はローム小ブロック混じりでやや締まりのある暗褐色土である。やや篠竹の根の攪乱も見られる。2はローム小ブロック混じりでやや締まりのない暗褐色土である。3はローム小ブロック混じりでやや締まりのない暗褐色土である。4はローム小ブロック、ローム粒混じりでやや締まりのない暗褐色土である。5は黒色土主体のローム粒混じりでやや締まりのある黒褐色土である。6は黒色土粒を多く含み締まりがある黒褐色土である。7は黒色土粒をより多く含みしまりが強い黒褐色土である。8はやや粘性の強い土質でローム粒が少し混ざる黒色土である。9は8より黒味が強く締まりがあり、若干のローム粒が混ざる黒色土である。10は黒味の非常に強い黒色土である。11は10と似た色調でやや粘質が強い黒色土である。12はやや暗褐色土粒を含む黒色土が多く混ざる黒褐色土である。13は12よりやや暗色化が進み締まりがなく若干のローム粒を含む黒褐色土である。14はややサラサラした感じで締まりのある黒褐色土である。15はローム粒を少量含みやや締まりのない暗褐色土である。16は砂のような火山灰(たぶん宝永火山灰)の堆積が主体の黒褐色土である。17は粘性があり、ローム粒、ロームブロック混じりの暗褐色土である。柵列の覆土と思われる。18は馬土手の基盤になる層で黒褐色土





第5図 大里所在馬土手A区～B区全測図及びトレンチ配置図(S=1/400),セクション図及び柵列出土状況図(S=1/80)

である。

A区トレンチでの馬土手の覆土の状況から推測すると表土1～2は近世以降で改変されている可能性が高いが盛土部分は旧表（盛土18）部分をほぼ水平にした後に左右から細かく積み上げられ構築されていたことが判る。表土1の下辺部と覆土の上部の間に宝永火山灰の痕跡が部分的に認められることから江戸時代にも何度か改変されたことが考えられる。

#### 001号馬土手B区（第5, 6図）

B区トレンチでの馬土手の覆土は盛土の表土1層が黒褐色土が主体でローム粒が若干混じる。本来盛土された部分であるが、篠竹の根による腐植化が著しいために分層が困難なため一括して表土1層とした。

プライマリーな盛土は1～8層観察できる。1はローム粒，ロームブロック混じりで締まりのない黒褐色土である。2はローム粒がほとんど含まれない黒褐色土である。3はローム粒，ロームブロック混じりでやや締まりのない暗褐色土である。4はややローム小ブロックを多く含みやや締まりがない暗褐色土である。5はローム粒混じりでやや粘性締まりのある黒褐色土である。土手本体部分は旧表土の黒色土の上部を多少整形してこれらの覆土が積み上げられている。6～8までの覆土は付属する柵列の覆土である。6はローム粒混じりの黒褐色土である。多少の畑の耕作の影響が見られる。7は粘性が強く締まりのある黒褐色土である。8は粘性がやや強く締まりのある暗褐色土である。左側半分は耕作時のトレンチャーにより深く削平されている。

B区トレンチでの馬土手の覆土の状況から見るとAトレンチより盛土の仕方が割と大きな単位で行われていた可能性も考えられるが、このあたりが谷頭にあたることから黒褐色土の粘性の強い層が厚みを増すことからきていることも一因であろう。

#### 001号馬土手C区（第6図）

C区トレンチでの馬土手の覆土は盛土の表土1層が黒褐色土が主体でローム粒が若干混じる。本来盛土された部分であるが、篠竹の根による腐植化が著しいために分層が困難なため一括して表土1層とした。

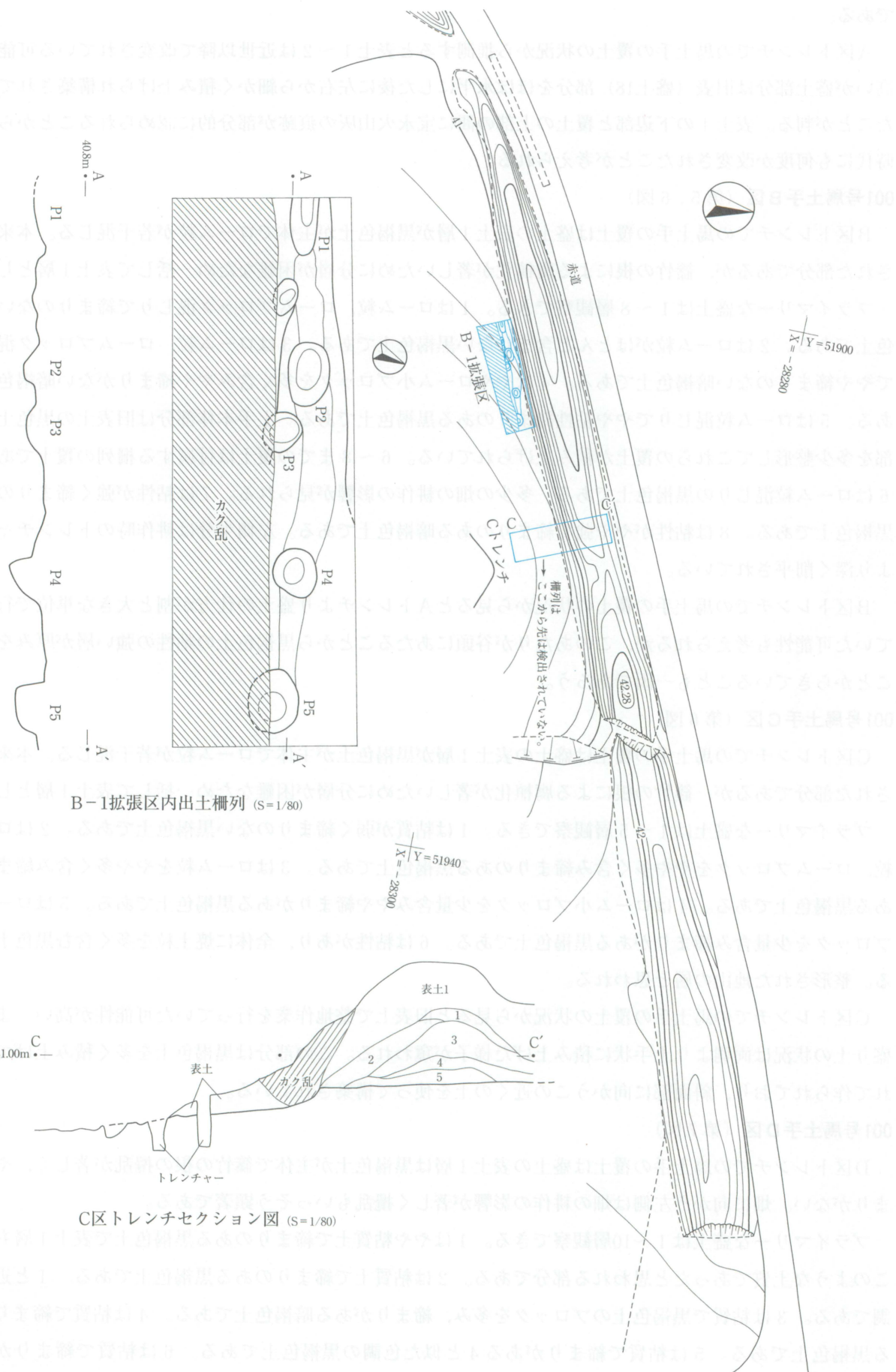
プライマリーな盛土は1～5層観察できる。1は粘質が弱く締まりのない黒褐色土である。2はローム粒，ロームブロックをやや多く含み締まりのある黒褐色土である。3はローム粒をやや多く含み締まりがある黒褐色土である。4はローム小ブロックを少量含みやや締まりがある黒褐色土である。5はローム小ブロックを少量含み締まりがある黒褐色土である。6は粘性があり，全体に焼土粒を多く含む黒色土である。整形された地山の層と思われる。

C区トレンチでの馬土手の覆土の状況から見ると旧表上で整地作業を行っていた可能性が高い。また、盛り土の状況は両側より土手状に積み上げた様子が窺われる。この部分は黒褐色土を多く積み上げて作られて作られており，斜面部に向かうこの近くの土を使って構築されている。

#### 001号馬土手D区（第7図）

D区トレンチでの馬土手の覆土は盛土の表土1層は黒褐色土が主体で篠竹の根の攪乱が著しく，やや締まりがない。畑に向かう左側は畑の耕作の影響が著しく攪乱もいっそう顕著である。

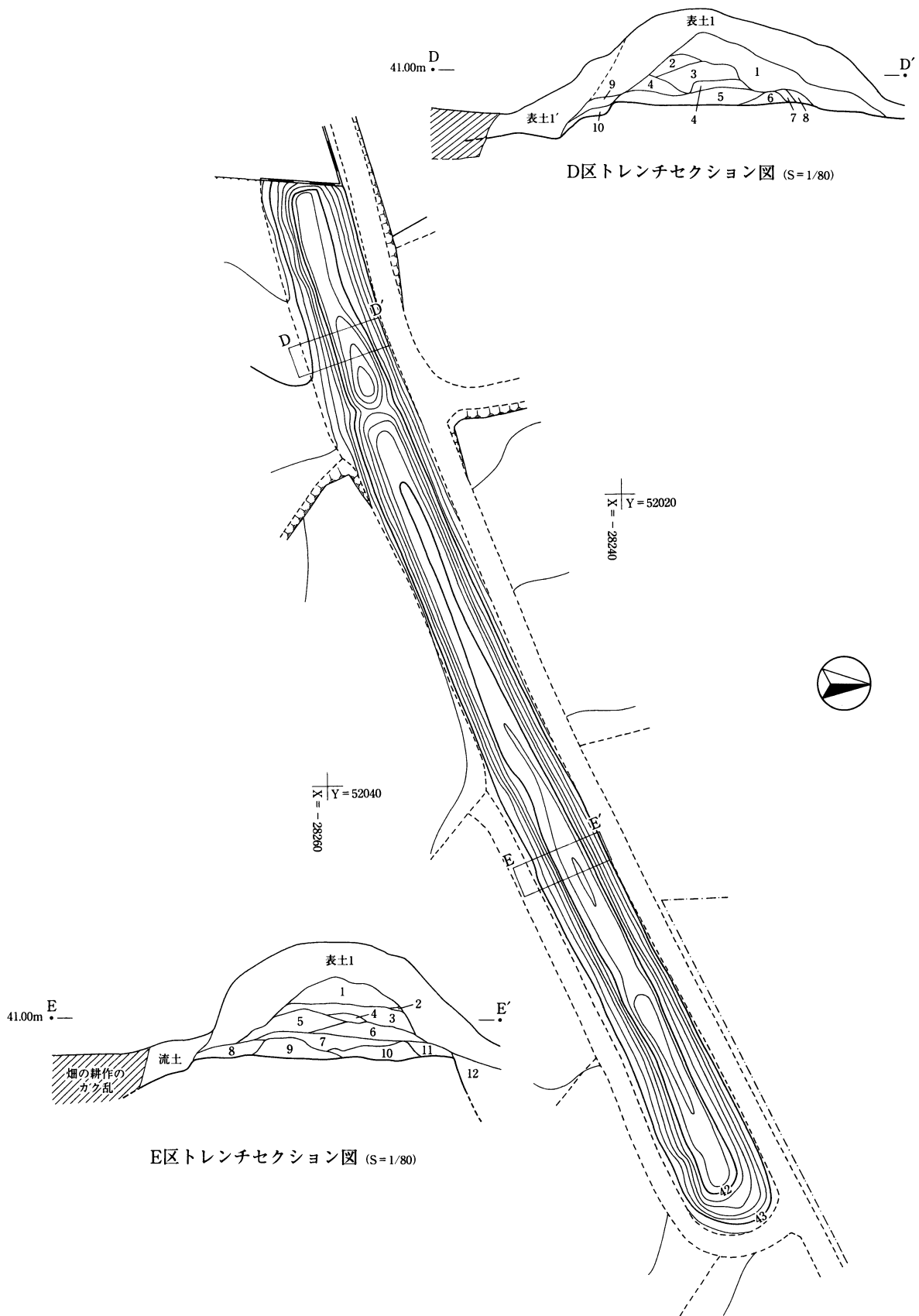
プライマリーな盛土は1～10層観察できる。1はやや粘質土で締まりのある黒褐色土で表土1層も本来このような土質であったと思われる部分である。2は粘質土で締まりのある黒褐色土である。1に近い色調である。3は粘質で黒褐色土のブロックを多み，締まりがある暗褐色土である。4は粘質で締まりのある黒褐色土である。5は粘質で締まりがある4と似た色調の黒褐色土である。6は粘質で締まりがある



B-1拡張区内出土柵列 (S=1/80)

C区トレンチセクション図 (S=1/80)

第6図 大里所在馬土手B区～C区全測図及びトレンチ配置図(S=1/400), セクション図及び柵列出土状況図(S=1/80)



第7図 大里所在馬土手D区～E区全測図及びトレンチ配置図 (S=1/400), セクション図 (S=1/80)



4, 5 と似た色調の黒褐色土である。7 は粘土が主体で締まりのない暗褐色土である。8 は粘質で黒褐色土のブロックを含む黒褐色土である。9 は粘性が強く締まりのある黒褐色土である。10 は粘性が強く締まりのある黒褐色土である。

D区トレンチでの馬土手の覆土の状況から見ると柵列は伴っているという判断は下せなかった。左側は特に畑等の攪乱が著しく表土1の左側部分もビニール等の投棄により土手部分が壊されている可能性が高い。盛土の特徴は比較的旧表の土を多く使って積み上げられており、あまりローム粒、ロームブロック等が顕著に見られない。

#### 001号馬土手E区（第7図）

E区トレンチでの馬土手の覆土は盛土の表土1層は黒褐色土が主体で篠竹の根の攪乱が著しく、やや締まりがない。畑部分に接する左側部分は土手部分の崩落土が主体で耕作による影響も顕著に見られる。

プライマリーな盛土は1～12層観察できる。1は黒色土粒、暗褐色土粒混じりで締まりのある暗褐色土である。2は宝永の火山灰と思われる砂質の黒色土である。3は黒色土ブロック、暗褐色土混じりで粘性締まりのある暗褐色土である。4はロームブロック混じりで締まりのある暗褐色土である。5はやや砂質で締まりのある黒褐色土である。6は黒色土粒が混じり砂質で締まりのある黒褐色土である。7は黒色土粒、焼土粒混じりの砂質でやや締まりのある黒褐色土である。8は黒色土粒、黄褐色ローム粒混じりの砂質でやや締まりのある黒褐色土である。9は8よりやや黒味の強い黒褐色土である。10はローム小粒を少量含み締まりのある暗褐色土である。11はやや粘質の強い黄色味がかかった黒褐色土である。

E区トレンチでの馬土手の覆土の状況から見るとD区と同様に柵列は伴っているという判断は下せなかった。右側の赤道部分に近い部分に落ち込み部分を数cm確認できたのでこちら側に堀が伴う可能性が高いことが判明した。表土下に宝永の火山灰と思われるブロックが見つかり、江戸時代に入っても繰り返し使用され改変されていたことが考えられる。

#### （2）柵列（第5, 6図）

A区のとレンチの馬土手本体の南側0.5m程のところに径0.5mから0.6mの円形ピットが、深さは表土から0.6m程のところ検出されている。深さは0.3m程度になるものと思われる。柳谷遺跡とほぼ同規模のものが連続して配列されているものと思われる。A区とB区の間拡張区1, 2でも同様に円形のピットが確認されている。拡張区2では攪乱が著しいため北側のみ確認できた。

B区のとレンチの中ではトレンチャーの攪乱により一部をセクション面で確認できたのみであった。さらにその先B-1拡張区では2m×6mの範囲で溝にピットを伴う形で柵列を検出している。位置のずれたものも見られることから作り替えを行ったことも考えられる。

C区～E区にかけてはトレンチ部分で柵列を検出した場所は皆無である。かなり深い位置まで畑の耕作が進んでおり、仮にあったとしても消失しているものと思われる。

## 第3章 宝馬遺跡93-77地点

### 第1節 旧石器時代

#### 1 調査区の土層説明 (第8図)

旧石器時代の本調査を行うにあたり、遺跡の標準的な土層を比較的残りの良好な7B-77区の確認グリッドを観察し、説明を行う。

耕作土……………畑の耕作などトレンチャー等の攪乱が著しい。いわゆるソフトローム部分も浸食されている。

攪乱土……………特にトレンチャー等機械掘りでハードローム下部までの土が大部分を占めローム粒を多く含む部分である。遺物の大部分はこの部分で検出されている。

VI層……………明黄褐色硬質ローム層、ATが集中的に包含され、下部の層に比べて明るい。

VII層……………褐色ローム層である。

IXa層……………やや暗褐色を呈し、赤色、黒色、暗緑色スコリアを含む。

IXc層……………暗褐色ローム層で暗緑色のスコリアを含む。

Xa層……………褐色を呈するローム層である。

Xb層……………Xaに比較して、やや暗い色調で暗灰褐色に近い。

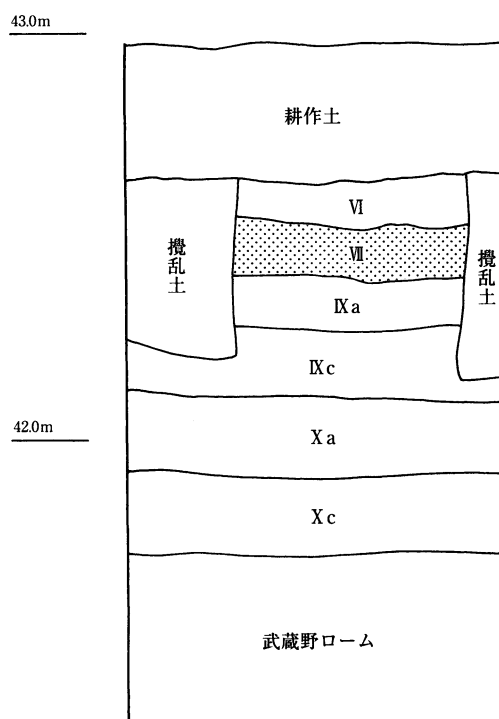
武蔵野ローム……………粘性を帯び、暗灰褐色になる。

なお、全体的に柔らかい土質であるが、トレンチャーにより、水分の浸透が進み、ソフト化が進んだ可能性がある。ソフトロームとハードロームの一部(Ⅲ層～Ⅴ層)は耕作により、破壊され、プライマリーな土層状態は明確に観察できる場所は調査区内では皆無であった。

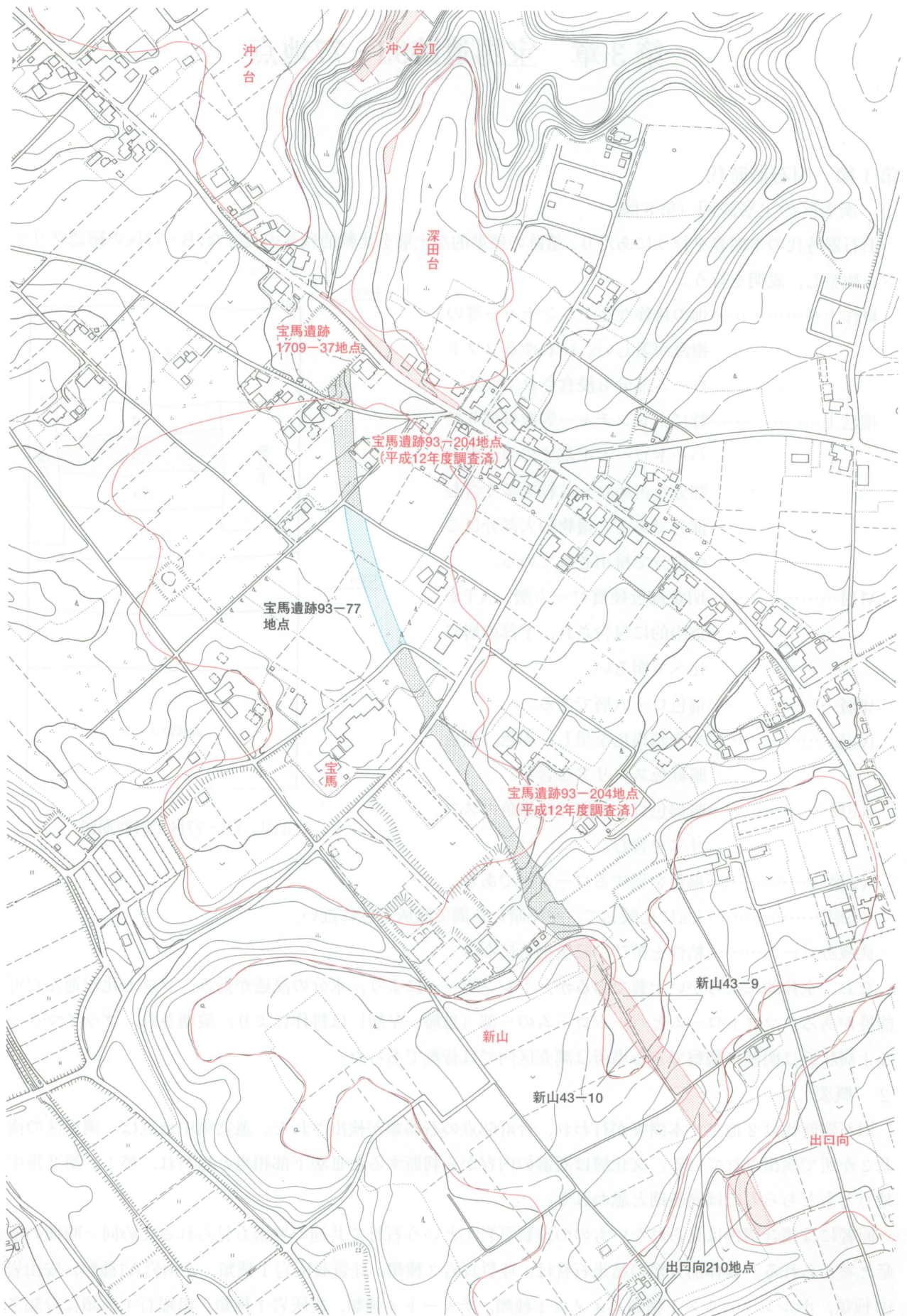
#### 2 概要

旧石器時代は2地点で本調査が行われ、合計68点の石器類が検出された。遺物集中地点は、調査区の南北2か所で検出されている。文化層は石器の内容から判断するとⅢ層下部相当と思われ、第1、第2集中地点ともどちらもほぼ同時期と思われる。

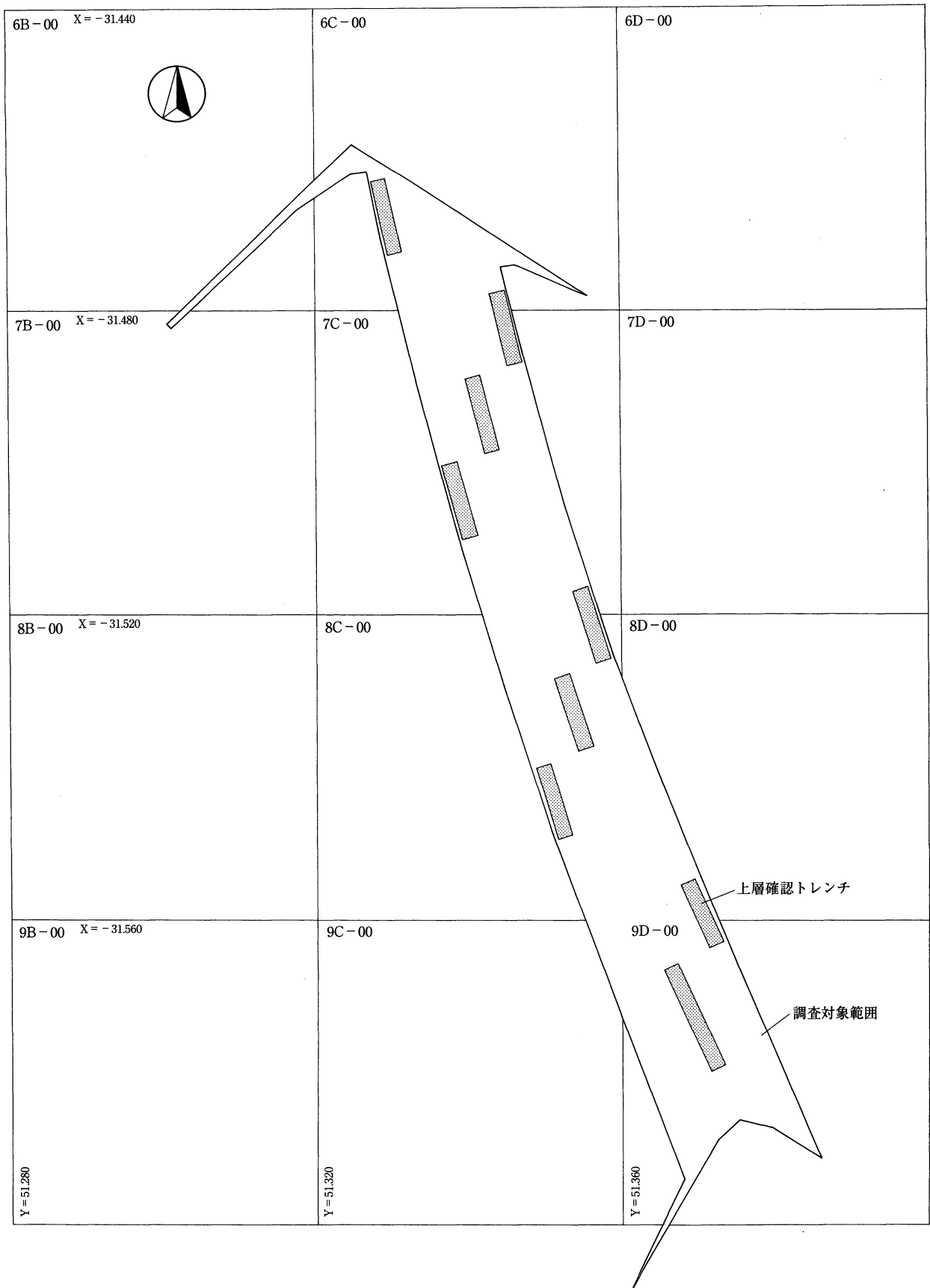
両者には接合関係は見られないものの珪質頁岩①という石材で共通の要素も見られるため同一時期の所産と考えられる。個体別分類の結果石材は、珪質頁岩3種類、珪質凝灰岩1種類、安山岩A1種類、安山岩B1種類、ホルンフェルス1種類、メノウ1種類、チャート4種類、凝灰岩1種類、黒曜石1種類に分類さ



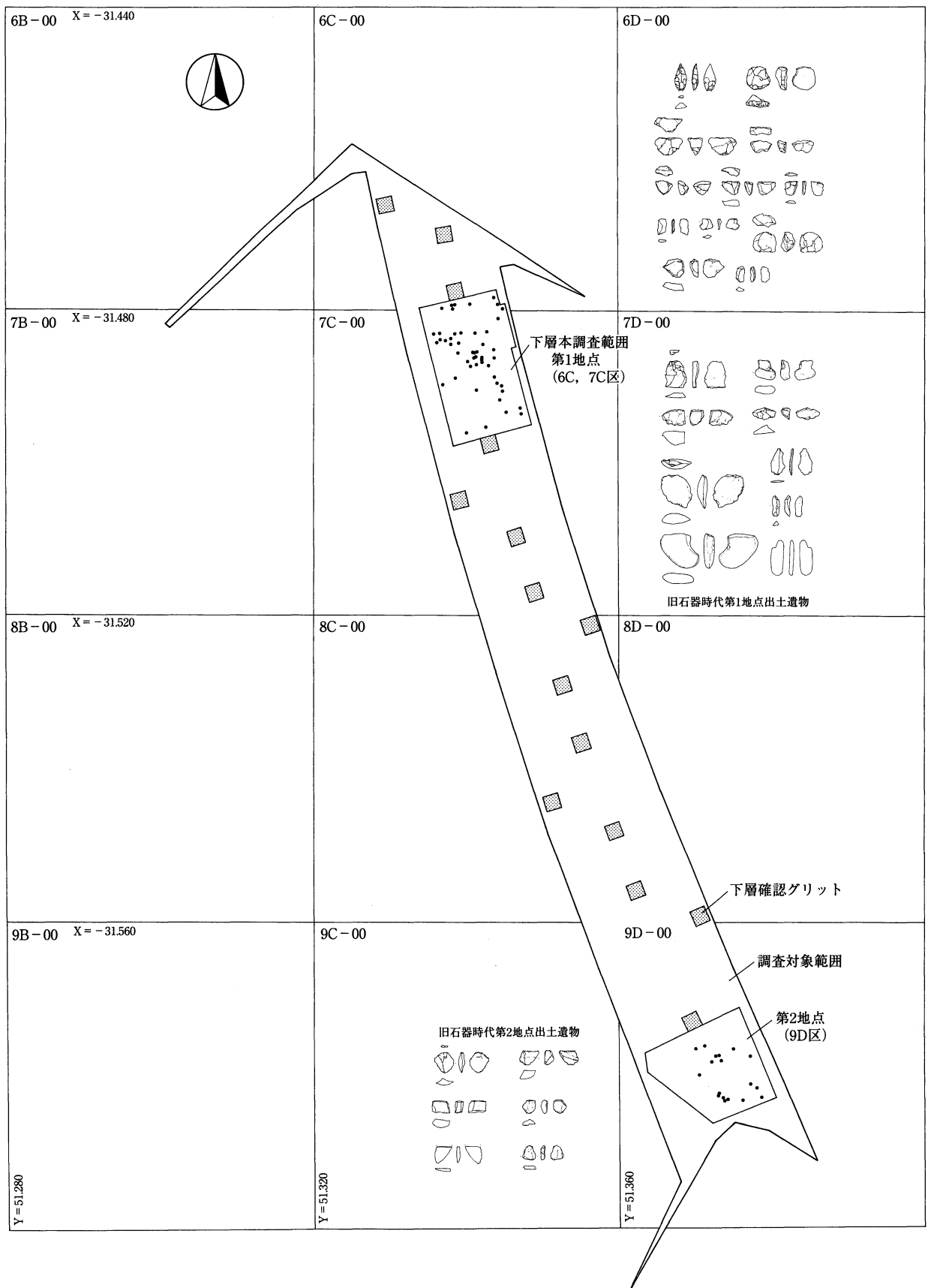
第8図 7B-77区土層断面図



第9図 宝馬遺跡93-77地点周辺地形図



第10図 宝馬遺跡93-77地点上層確認トレンチ配置図 (Scale=1/750)



第11図 宝馬遺跡93-77地点下層確認グリッド配置及び本調査範囲図 (Scale=1/750)

れた。礫については本来の遺物であるかどうか判断しかねるためローム粘土付着の礫以外にも分布図に掲載はしたが、後世の混入の可能性が高い。また、いずれの遺物も攪乱が著しいため本来の位置から移動している可能性が非常に高い。

珪質頁岩①はやや緑黄色に近いものが多く時として灰色の色調の強いものも見られる。第1石器集中地点で一番多く見られる石材である。珪質頁岩②は14の石核以外見あたらない石材である。やや薄い緑色がかかった石材でところどころ薄く縞が入るものである。珪質頁岩③は21の原礫以外では見あたらない単独の石材である。黄緑色の扁平の楕円礫である。珪質凝灰岩①はやや乳白色に近いものでざらついた感じのする石材である。第1石器集中地点で碎片が1点のみ検出されているだけで詳細は不明であるが、珪質頁岩①の一部である可能性も考えられる。安山岩A①は風化面が濃緑色で、断面が黒色不透明なものでいわゆるガラス質安山岩と呼ばれるものである。安山岩B①はいわゆる通称トロトロ石と呼ばれるもので、風化面は薄灰色で断面は濃灰色である。ホルンフェルス①は淡灰白色でごま状の斑点及び灰色の帯状の模様が入るものである。メノウ①は黄色味が強くガラス質に富み、割れ方が貝殻状断口を示すものである。チャートは4種類のもので認められる。チャート①は濃い黄色で半透明で板状の節理面が多く見られる石材である。チャート②は灰白色でやや青味の強いものである。チャート③は礫面が白く風化した青みの強いガラス質に富む石材で節理面での破断面の著しいものである。チャート④は濃い緑色の半透明な石材で混ざりものの多いものである。凝灰岩は薄い緑色でややざらついた印象のある石材である。黒曜石①はやや狭雑物が入った黒みの強いガラス質の石材である。

### 3 第1石器集中地点（第12, 13図）

分布 7C-15グリッドを中心に50点がやや散漫に拡がる。垂直分布は、ほとんどの遺物は攪乱土層から出土と記載されているため定かではないが、平面的には大きく移動していないと思われる。遺物の内容からⅢ層下部に主体を置く石器群かと思われる。平面分布は、東西8m、南北16mの範囲で楕円状に広くまとまりなく分布している。

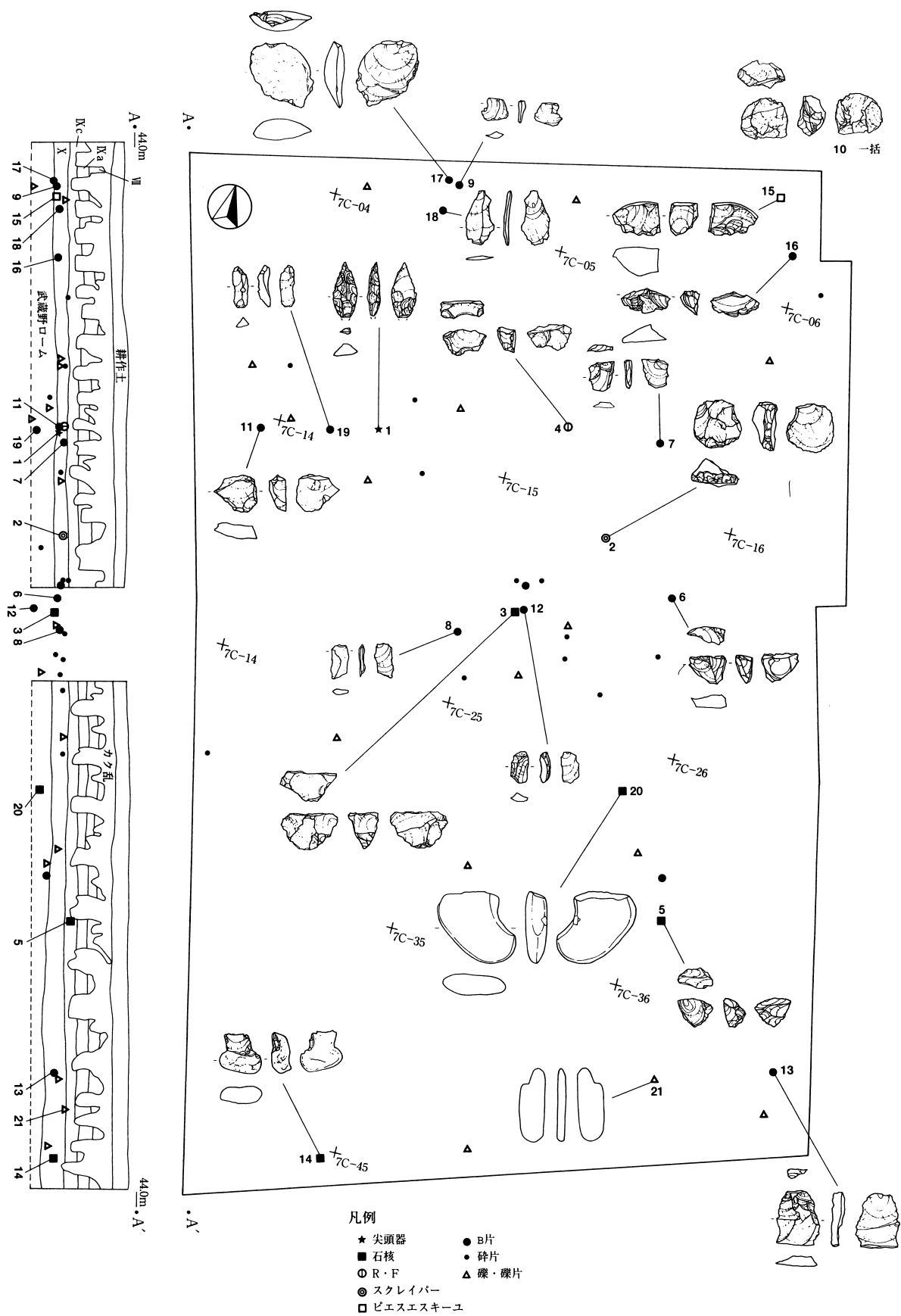
石材 石材については石器類が珪質頁岩①18点、珪質頁岩②1点、珪質凝灰岩①1点、安山岩A①2点、安山岩B①1点、メノウ①6点、チャート②1点、チャート③3点、チャート④1点、ホルンフェルス①1点、合計35点で構成される。その他に礫15点が含まれる。なお、これらについては後世の攪乱による混入の可能性が高いものが多く所属については不明であるため分布のみの報告とする。

器種 尖頭器1点、スクレイパー1点、リタッチ・ド・フレイク1点、石核（石核素材を含む）6点、ピエスエスキューユ1点、剥片10点（調整剥片1点含む）、碎片15点で構成される。

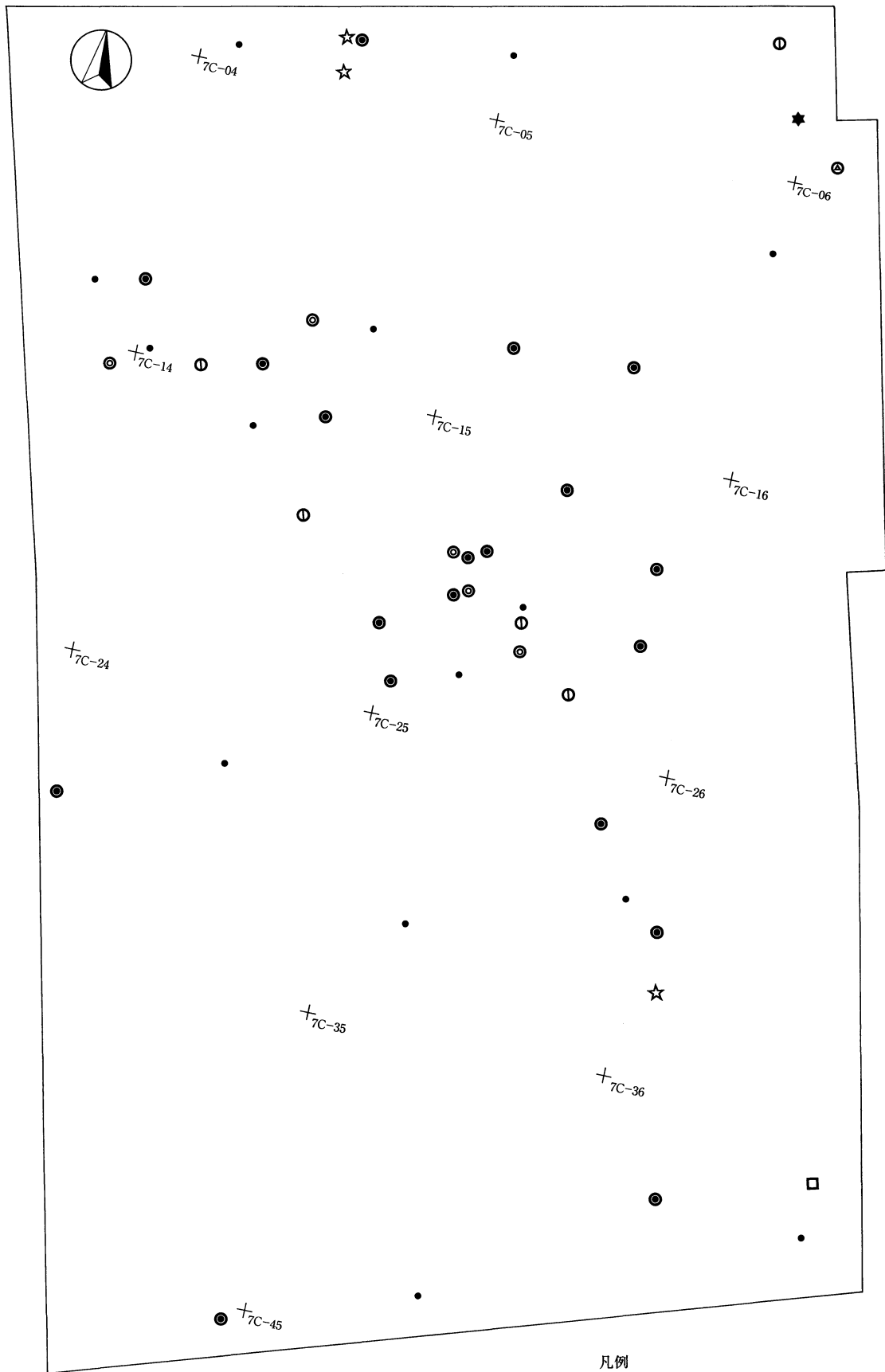
尖頭器（第14図1）珪質頁岩①の縦長剥片を素材にして作られた尖頭器である。基部が欠損しているものの残りは非常に良い。調整は背面側は先端部から基部全体に比較的大きめの剥離で丁寧に行われている。主剥離面側は基部から胴部にかけて半分覆う程度に調整が行われている。断面形状は剥片の形態を色濃く残し台形になる。基部の破損は背面から主剥離面側に力がかかるように折れている。残全長37.9mm、幅17.1mm、厚み8.2mm、重量5.12gである。

スクレイパー（第14図2）珪質頁岩①（濃い灰色）のやや背部の中央部が盛り上がった円形に近い剥片素材を使って作られている。背面の剥離面から直前まで石核として使用していた剥片と思われる。打面側を除く周辺部分に、主剥離面側から背面側にかけて比較的細かく丁寧な小剥離で調整が行われている。全長33.4mm、幅14.3mm、厚み14.3mm、重量18.96gである。



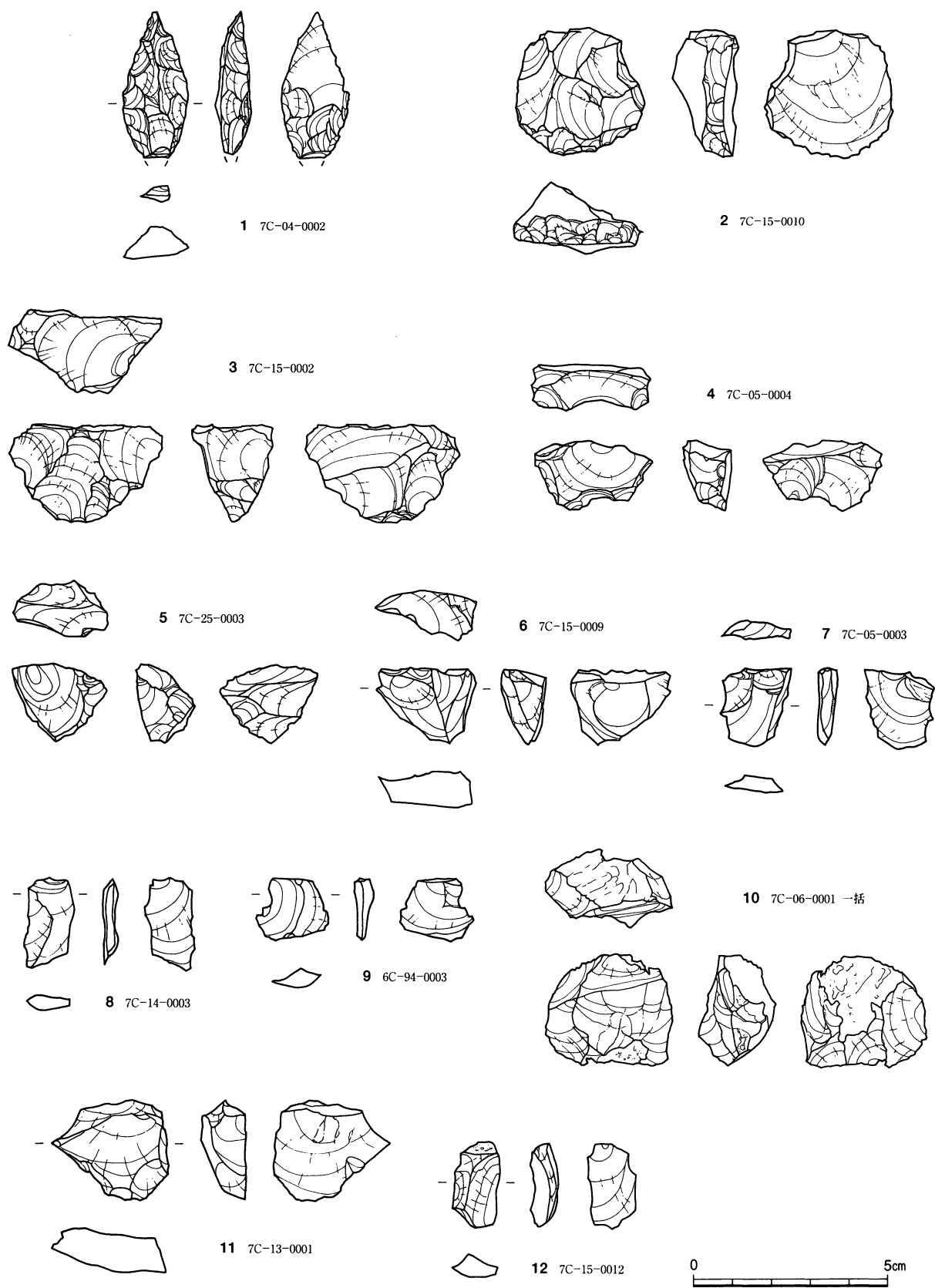


第12図 宝馬遺跡93-77地点旧石器時代第1地点遺物出土状況図 (Scale=1/100)

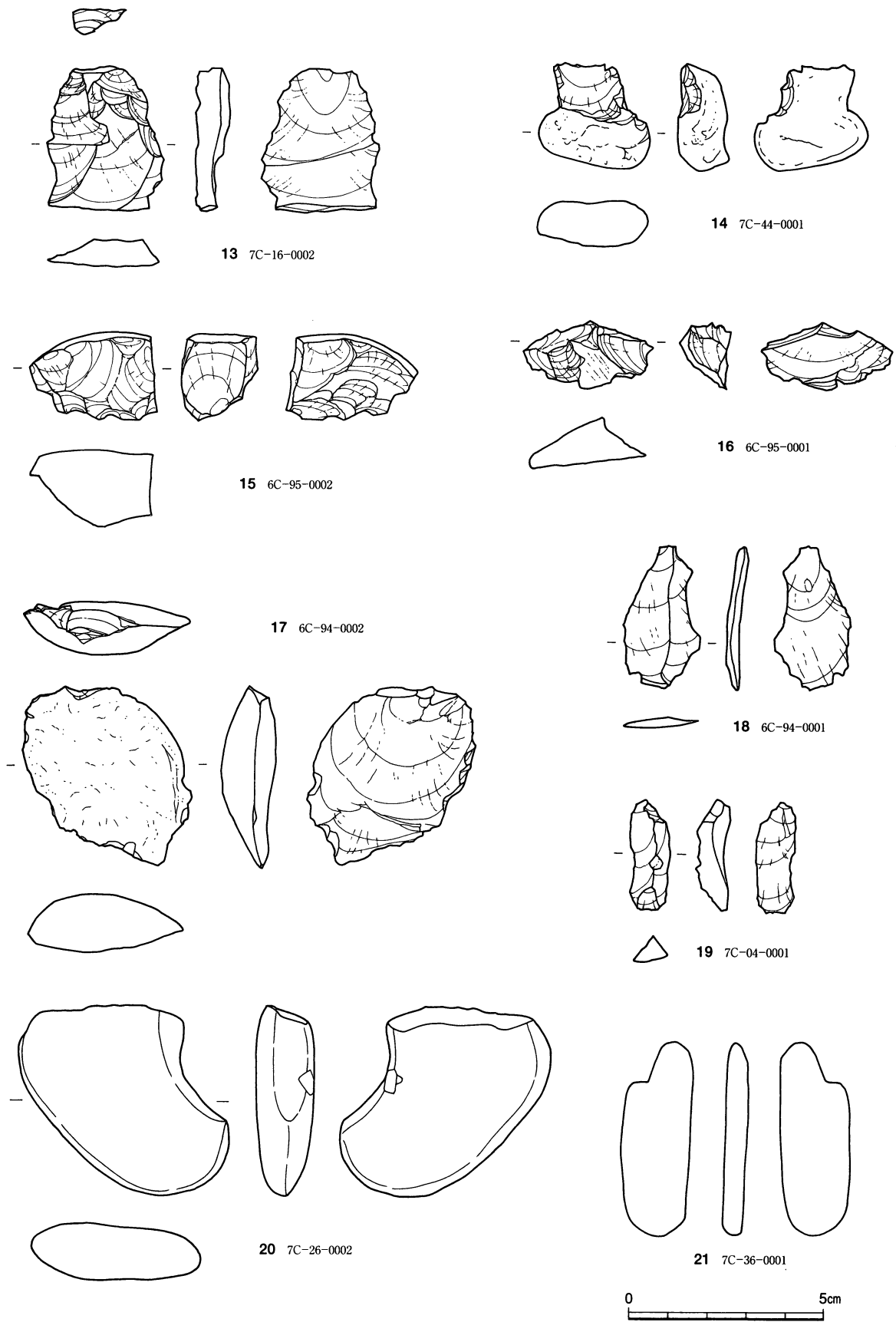


第13図 宝馬遺跡93-77地点旧石器時代第1地点石材別出土状況図 (Scale = 1/80)





第14図 宝馬遺跡93-77地点旧石器時代第1地点出土遺物実測図1



第15図 宝馬遺跡93-77地点旧石器時代第1地点出土遺物実測図2

リタッチ・ド・フレイク（第14図4）珪質頁岩①（灰色が比較的強い）の石核を再利用、もしくは調整剥片を素材として作られている。比較的厚みのある横広の台形状の小剥片の左右側辺部分に細かく調整を施している。全長17.0mm、幅30.8mm、厚み11.5mm、重量7.47gである。

石核（第14、15図3、5、10、14、20、21）3は珪質頁岩①の石核である。剥離面の状態を観察していくと任意の方向から小剥片を剥ぎ取っていった様子がわかる。珪質頁岩①の残された剥片類が全長が20mm前後のものが多いことから想像される。全長24.0mm、幅39.1mm、厚み16.37mm、重量16.37gである。

5は珪質頁岩①の比較的小形の石核である。横方向からの小さな剥離も残されており、この時点で廃棄されたものと思われる。全長19.4mm、幅24.9mm、厚み15.0mm、重量5.11gである。

10はメノウ①の石核である。灰白色の礫面を打面として上下両端より剥離を開始して、最終的には横方向にも小剥離を行っている。小円礫を素材としていると思われる。碎片も少量見つかっており、珪質頁岩①とともにこの付近で剥片剥離作業が行われていたことが想像される。全長27.8mm、幅32.9mm、厚み18.3mm、重量15.46gである。

14は珪質頁岩②の石核である。緑色が強くやや節理面が見られる小楕円礫である。礫の外縁部より中央部に一枚剥離を行い廃棄されている。このくらいの大きさの礫を石核の素材として持ち込んで石器製作を行っていた可能性もある。全長27.2mm、幅29.9mm、厚み12.7mm、重量13.84gである。

20は安山岩B①のやや不整な扁平楕円礫を素材にして縁辺の一部を打ち欠いた状態廃棄されている。全長49.0mm、幅46.2mm、厚み15.5mm、重量47.06gである。14と同様にこのくらいの大きさの礫を石核の素材として持ち込んで石器製作を行っていた可能性もある。

21は珪質頁岩③の扁平な長楕円礫である。石核素材として持ち込まれた可能性が高いためここで取り上げた。全長50.2mm、幅18.1mm、厚み6.0mm、重量9.65mmである。

ピエスエスキュー（第15図15）風化面が白色化したチャート③の円礫を素材にして厚みのある剥片の上下両端に細かく打撃痕が見られ、小剥片を剥ぎ取った痕跡が窺われる。両極打撃による打痕と剥離面を持つ石核ともいえる。全長22.7mm、幅32.4mm、厚み19.4mm、重量17.87gである。

剥片（第14、15図6～9、11～13、16～19）6は珪質頁岩①の調整剥片である。背面は主剥離面と同様に上方向からの二面の剥離面を残している。大きさから比較的最終局面に近い時点で石核から分離された調整剥片と思われる。全長20.9mm、幅12.7mm、厚み12.7mm、重量5.22gである。

7は珪質頁岩①の小剥片である。比較的薄く剥がされた小剥片で背面は主剥離面の剥離方向から見てやや横方向から剥離が複数見られる。石核の状況から判断するとこの剥片の形態が多く生産されていたことが考えられる。全長20.0mm、幅17.6mm、厚み5.2mm、重量1.55gである。

8は珪質頁岩①の小剥片である。形態はやや縦長で、背面には主剥離面と同じ上方向からの剥離が2条見られる。全長22.9mm、幅11.9mm、厚み3.8mm、重量1.09mmである。

9は珪質頁岩①の小剥片である。形態は台形気味で打撃部分からやや膨らむ。背面には主剥離面に対し左方向から2条の剥離が見られる。全長14.6mm、幅18.7mm、厚み4.1mm、重量1.11gである。

11はメノウ①の剥片である。形態はやや横広の不整な剥片である。背面は複数の主剥離面と同じ上方向からの剥離が見られる。全長25.9mm、幅30.2mm、厚み10.5mm、重量8.40gである。

12はメノウ①の小剥片である。形態はやや主剥離面側が膨らみ気味で縦長の剥片である。打面に礫面を残す。背面は左右両方からの剥離面が見られる。全長20.9mm、幅12.1mm、厚み6.2mm、重量1.67gである。

13はホルンフェルス①の剥片である。単独の石材でしかも比較的整った形の縦長剥片である。背面はほとんど主剥離面と同様に上方向からの大きな剥離面で構成されている。縁辺部分に多少の刃こぼれのような剥離が観察される。使用痕である可能性も考えられる。全長37.4mm，幅29.4mm，厚み7.8mm，重量9.47gである。

16は黒曜石①の剥片である。厚みのある平行四辺形のような形態である。背面は多方向の小剥離面を残す。中央部分は黒曜石特有の節理面を残す。若干の夾雑物が認められる。全長18.0mm，幅33.6mm，厚み12.4mm，重量4.23gである。

17は安山岩A①の剥片である。背面はほぼ礫面で覆われている。縁辺部分はやや薄く鋭い。刃器として使用可能な大形の剥片である。断面を見ると丸みがあり，比較的扁平な楕円礫を石核として作出されたものと思われる。全長45.4mm，43.9mm，厚み13.2mm，重量27.26gである。

18は安山岩A①の剥片である。背面は主剥離面と同様に上方向から2面の剥離面で構成されている。17と18以外にはこの石材は見られない。攪乱が著しいため小さな碎片類は消失してしまった可能性も考えられる。全長37.2mm，幅19.4mm，厚み3.6mm，重量2.41gである。

19はチャート④の剥片である。単独石材である。形態的にみると細石刃のように見えるが厚みがあるため違うであろう。背面は主剥離面と同じ上方面の2面の剥離面が見られる。全長28.3mm，幅9.6mm，厚み7.4mm，重量1.90gである。

碎片類（図版なし） 碎片類は15点中8点が珪質頁岩①で占められる。全長10.0mm～16.0mmまでの大きさで重量0.3g～1.0gくらいになる。次にメノウ①が3点見られる。大きさは珪質頁岩①とほぼ同様である。

礫片類（図版なし） 礫片については攪乱が著しく石器と同列に扱うことが困難なため石核（及び同等の礫）以外は後世の混入品の可能性が高いため検出地点のみ記載して参考とした。

#### 4 第2石器集中地点（第16，17図）

分 布 9D-22～32グリッドを中心に18点がやや散漫に拡がる。垂直分布は，ほとんどの遺物は攪乱土層から出土と記載されているため定かではないが，平面的には大きく移動していないとも思われる。遺物の内容からⅢ層下部に主体を置く石器群かと思われる。平面分布は，東西8m，南北8mの範囲で円状に広く比較的まとまりなく分布している。

石 材 石材については石器類がチャート①1点，チャート②4点，チャート③2点，珪質頁岩①1点，凝灰岩①1点，合計9点で構成される。その他に礫9点が含まれる。なお，これらについては後世の攪乱による混入の可能性が高いものが多く所属については不明であるため分布のみの報告とする。

器 種 ピエスエスキュー4点，剥片2点（切断剥片1点含む），碎片3点で構成される。

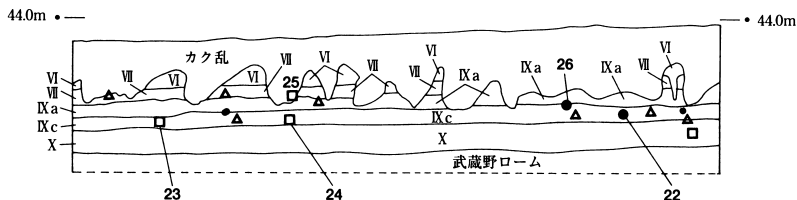
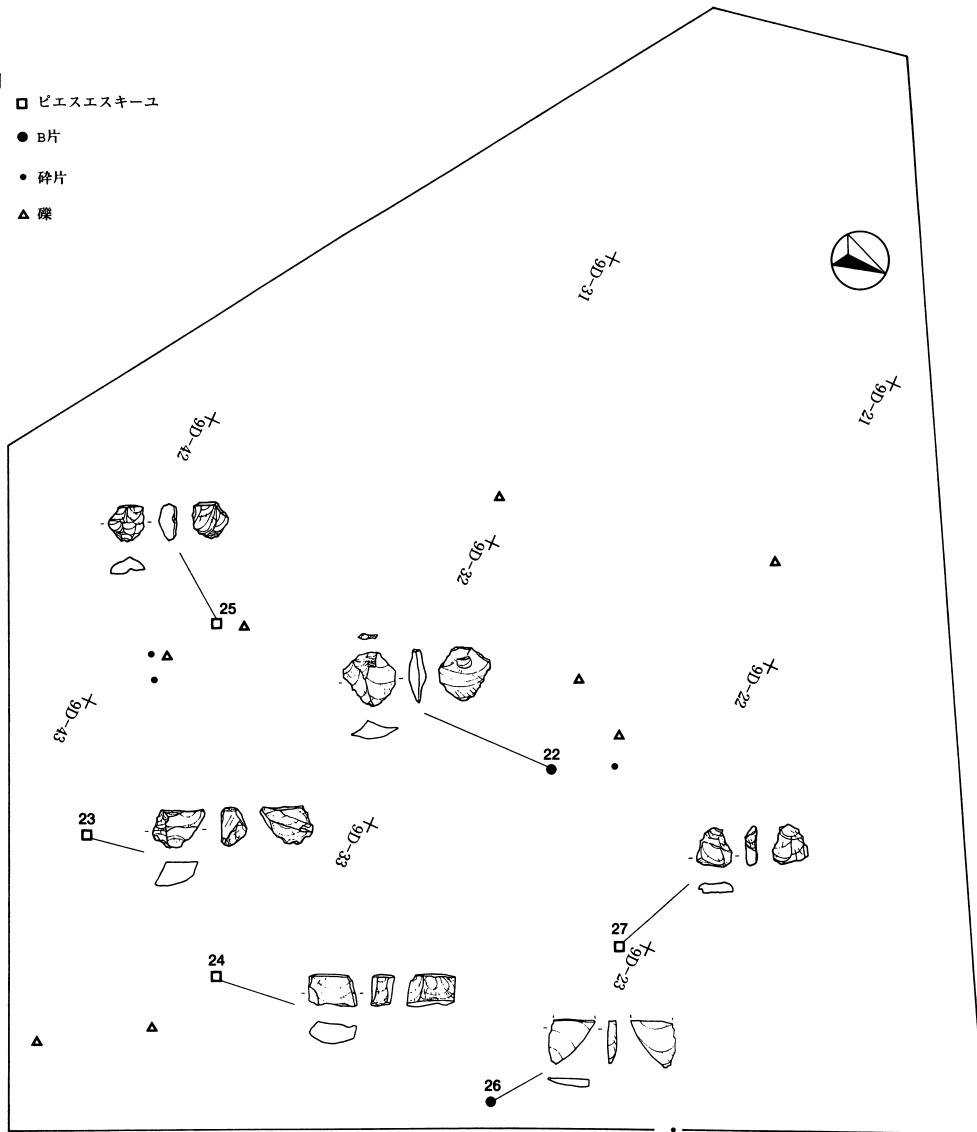
ピエスエスキュー（第18図23～25，27）23はチャート③のピエスエスキューである。断面形はやや厚みのある不整な台形で先端部に打撃時の小剥離痕を残す。側面には節理面も見られる。側辺部分には打撃時にはない細かな調整とおぼしき剥離も見られる。全長19.3mm，幅29.6mm，厚み7.41mm，重量7.41gである。

24はチャート③のピエスエスキューである。礫面を打撃面をしているため小楕円礫を素材として剥離されたものと思われる。全長15.6mm，幅24.6mm，厚み10.3mm，重量6.71gである。

25はチャート②のピエスエスキューである。打撃面は礫面ある。先端部分に打撃時の小剥離痕を残す。縁辺部分は比較的薄い，断面は厚みのある不整な台形をしている。全長16.4mm，幅20.5mm，厚み9.1mm，重量3.55gである。

凡例

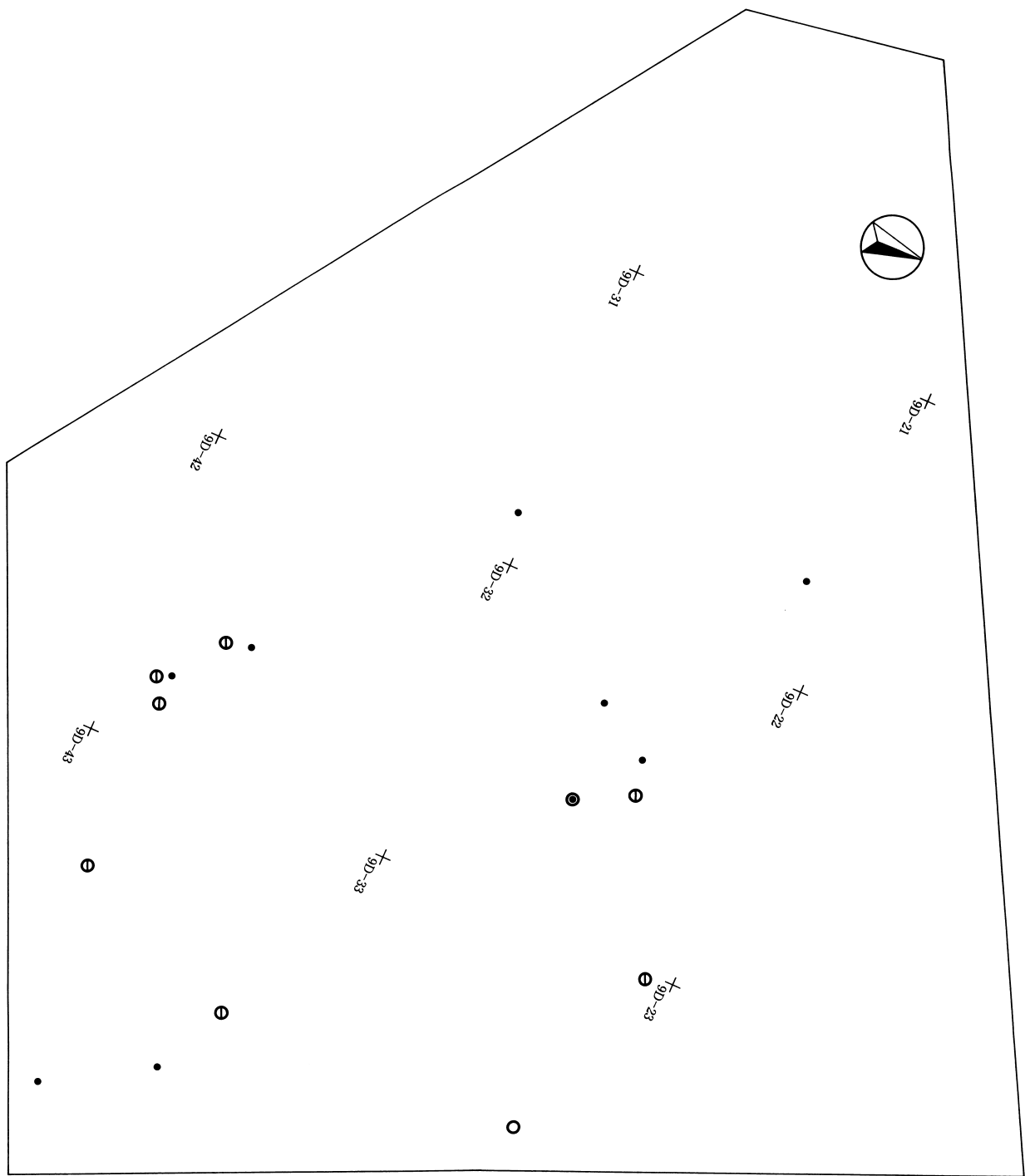
- ピエスエスキュー
- B片
- 碎片
- ▲ 礫



第16図 宝馬遺跡93-77地点旧石器時代第2地点遺物出土状況図 (Scale = 1/100)

27はチャート②のピエスエスキューである。背面を礫面が半分近く覆うことから小円礫の表面に近い部分と思われる。全長19.3mm，幅18.2mm，厚み5.1mm，重量2.54gである。

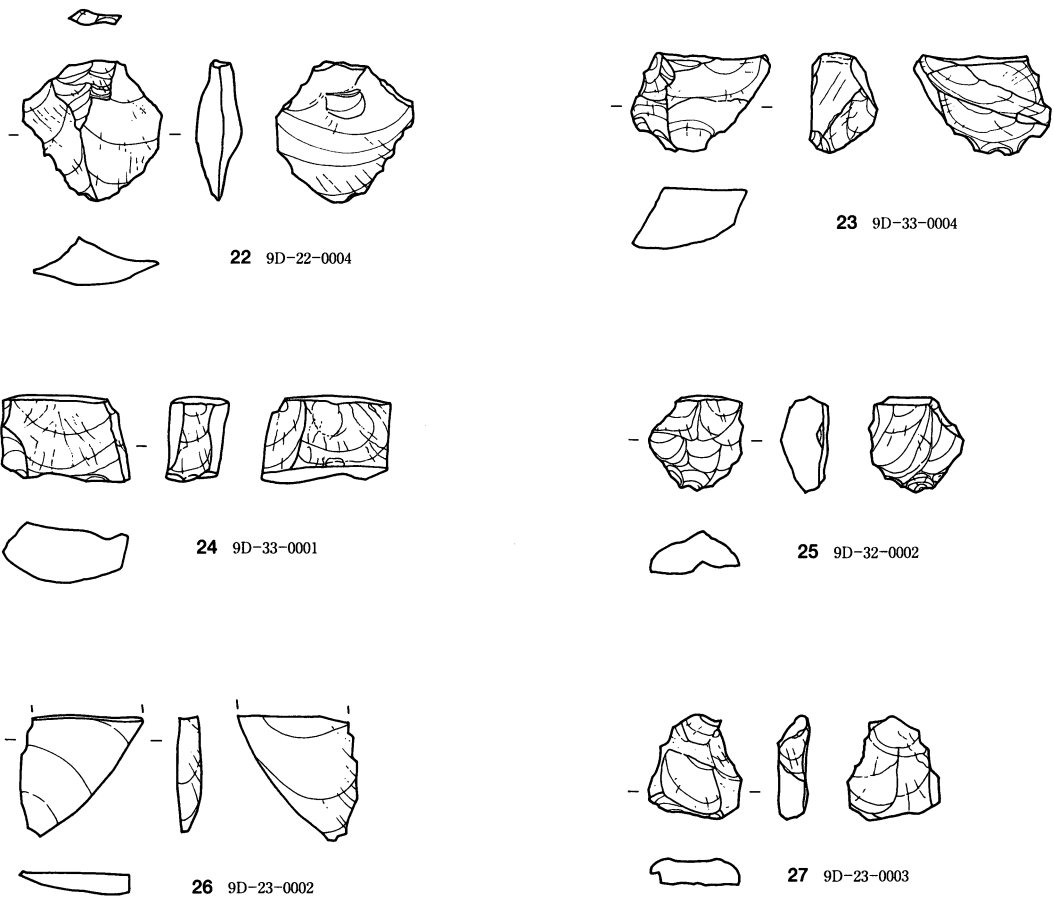
剥片（第18図22，26）22は珪質頁岩①の剥片である。背面は主剥離面と同方向の上方向からの剥離面が5面で構成される。縁辺部分は薄く鋭い。断面形は中央部分が厚みを増す菱形に近い。第1石器集中地点の主要な石材である珪質頁岩①であるため共通の要素として注目される。全長28.4mm，幅27.8mm，厚み8.2mm，重量4.52gである。



- 凡例
- ⊙ チャート
  - 凝灰岩
  - 珪質頁岩
  - その他礫

第17図 宝馬遺跡93-77地点旧石器時代第2地点石材別出土状況図 (Scale=1/100)

26は凝灰岩①の剥片である。打面は折断のため不明である。打撃時に折れたかどうかは他に同一の石材等がないため確認はできない。背面は主剥離面と逆方向の剥離が一面見られる。残全長23.7mm, 幅21.3mm, 厚み4.5mm, 重量2.31mmである。



第18図 宝馬遺跡93-77地点旧石器時代第2地点出土遺物実測図



第19図 宝馬遺跡93-77地点縄文時代包含層出土遺物実測図

碎片（図版なし） 碎片類は3点中3点ともチャート②で占められる。全長8.7mm～12.4mmまでの大きさで重量0.54g～1.48gになる。両極技法による打撃時のものと思われる。

礫片類（図版なし） 礫片については攪乱が著しく石器と同列に扱うことが困難なため石核（及び同等の礫）以外は後世の混入品の可能性が高いため検出地点のみ記載して参考とした。

第1表 旧石器時代 第1地点石器観察表

挿入番号	グリッド	遺物番号	器種	打面 形状	調整 部位	切断 部位	末端 形状	背面構成							最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	母岩番号	接合資料	層位	標高 m	備 考	
								C	S	H	T	R	L	D										V
第15図-18	6C-94	0001	剥片	P			F				2					37.2	19.4	3.6	2.41	安山岩A①		攪乱	42.698	
第15図-17	6C-94	0002	剥片	1			F	1								45.4	43.9	13.2	27.26	安山岩A①		攪乱	42.58	
第14図-9	6C-94	0003	小剥片	1									2			14.6	18.7	4.1	1.11	珪質頁岩①		攪乱	42.612	
	6C-94	0004	礫片																			攪乱	42.214	混入の可能性有り
第15図-16	6C-95	0001	剥片	2												18	33.6	12.4	4.23	黒曜石①		攪乱	42.695	
第15図-15	6C-95	0002	ピエスエスキュー													22.7	32.4	19.4	17.87	チャート③		攪乱	42.654	
	6C-95	0003	礫片																			攪乱	42.798	混入の可能性有り
	6C-96	0001	砕片													17.1	12	1.5	0.24	珪質凝灰岩①		攪乱	42.807	
	7C-03	0001	礫片																			攪乱	42.688	混入の可能性有り
	7C-03	0002	砕片													16.2	13.7	4.4	0.97	珪質頁岩①		攪乱	42.706	
第15図-19	7C-04	0001	剥片(細石刃?)	1			F			3	1					28.3	9.6	7.4	1.9	チャート④		攪乱	42.228	
第14図-1	7C-04	0002	尖頭器													37.9	17.1	8.2	5.1	珪質頁岩①		攪乱	42.65	
	7C-04	0003	砕片													13.8	12.1	4.9	0.47	メノウ①		攪乱	42.502	
	7C-04	0004	礫片																			攪乱	42.49	混入の可能性有り
	7C-04	0005	礫片																			攪乱	42.166	混入の可能性有り
第14図-7	7C-05	0003	小剥片	1												20	17.6	5.2	1.55	珪質頁岩①		攪乱	42.787	
第14図-4	7C-05	0004	石核転用R・F													17	30.8	11.5	7.47	珪質頁岩①		攪乱	42.736	
	7C-05	0005	礫片																			攪乱	42.715	混入の可能性有り
第14図-10	7C-06	0001	石核													27.8	32.9	18.3	15.46	メノウ①		攪乱	42.715	一括
第14図-11	7C-13	0001	剥片	1			F			2	1					25.9	30.2	10.5	8.4	メノウ①		攪乱	42.712	
	7C-14	0001	礫片																			攪乱	42.668	混入の可能性有り
	7C-14	0002	砕片													8.2	17.7	2.7	0.36	珪質頁岩①		攪乱	42.696	
第14図-8	7C-14	0003	小剥片	P												22.9	11.9	3.8	1.06	珪質頁岩①		攪乱	42.698	
	7C-14	0004	砕片													10.7	17.7	2.1	0.47	チャート②		攪乱	42.338	
	7C-15	0001	砕片													13.4	14.4	2.4	0.56	珪質頁岩①		攪乱	42.665	
第14図-3	7C-15	0002	石核													24	39.1	19.2	16.37	珪質頁岩①		攪乱	42.595	
	7C-15	0003	砕片													16.7	14.2	4.3	0.93	メノウ①		攪乱	42.802	
	7C-15	0004	砕片													11.7	19.3	6.3	0.8	珪質頁岩①		攪乱	42.678	
	7C-15	0005	砕片													11.9	18.9	4	0.94	珪質頁岩①		攪乱	42.805	
	7C-15	0006	砕片													14.7	13.8	6.1	1.69	チャート③		攪乱	42.746	
	7C-15	0007	砕片													7.4	17	3	0.38	メノウ①		攪乱	42.728	
	7C-15	0008	砕片													10.3	15.5	3	0.69	チャート③		攪乱	42.72	
第14図-6	7C-15	0009	調整剥片													20.9	27.1	12.7	5.22	珪質頁岩①		攪乱	42.622	
第14図-2	7C-15	0010	スクレイパー													33.4	33.9	14.3	18.96	珪質頁岩①		攪乱	42.725	
	7C-15	0011	礫片																			攪乱	42.33	混入の可能性有り
第14図-12	7C-15	0012	小剥片	P							1	1				20.9	12.1	6.2	1.67	メノウ①		攪乱	42.224	Ⅲ層下部
	7C-15	0013	礫片																			攪乱	42.585	混入の可能性有り
	7C-15	0014	砕片													13.3	14.7	7.7	1.09	珪質頁岩①		攪乱	42.516	
	7C-24	0001	砕片													19.1	13.7	2	0.6	珪質頁岩①		攪乱	42.714	一括
	7C-24	0002	砕片													10.3	16.2	2.4	0.38	珪質頁岩①		攪乱	42.714	
	7C-24	0003	礫片																			攪乱	42.725	混入の可能性有り
	7C-25	0001	礫片																			攪乱	42.423	混入の可能性有り
	7C-25	0002	礫片																			攪乱	42.614	混入の可能性有り
第14図-5	7C-25	0003	小石核													19.4	24.9	15	5.11	珪質頁岩①		攪乱	42.364	
	7C-26	0001	調整剥片													15	23.6	9.9	2.87	珪質頁岩①		攪乱	42.454	
第15図-20	7C-26	0002	原礫(石核用?)													49.5	49	13.3	47	安山岩B①		攪乱	42.876	
	7C-35	0001	礫片																			攪乱	42.476	混入の可能性有り
第15図-21	7C-36	0001	原礫(石核用?)													50.2	18.1	6	9.65	珪質頁岩		攪乱	42.66	
第15図-13	7C-36	0002	剥片	1			O					5				37.4	29.4	7.8	9.47	凝灰岩①		攪乱	42.56	
	7C-36	0003	礫片																			攪乱	42.747	混入の可能性有り
第15図-14	7C-44	0001	石核													27.2	29.9	12.7	13.84	珪質頁岩②		攪乱	42.563	

第2表 旧石器時代 第2地点石器観察表

挿入番号	グリッド	遺物番号	器種	打面 形状	調整 部位	切断 部位	末端 形状	背面構成							最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	母岩番号	接合資料	層位	標高 m	備 考	
								C	S	H	T	R	L	D										V
	9D-11	0001	礫片																			攪乱	42.69	混入の可能性有り
	9D-22	0002	礫片																			攪乱	42.8	混入の可能性有り
第19図-22	9D-22	0003	砕片													9.3	14.3	5.1	0.72	チャート②		攪乱	42.738	
	9D-22	0004	剥片	1			F			4						28.4	27.8	8.2	4.52	珪質頁岩①		攪乱	42.762	混入の可能性有り
	9D-22	0005	礫片																			攪乱	42.869	
第19図-26	9D-23	0002	剥片(切断)				F									23.7	21.3	4.5	2.31	凝灰岩①		攪乱	42.588	
第19図-27	9D-23	0003	ピエスエスキュー													19.3	18.2	5.1	2.54	チャート①		Ⅲ層下部	42.588	
	9D-31	0001	礫片																			攪乱	42.77	混入の可能性有り
	9D-32	0001	礫																			攪乱	42.94	混入の可能性有り
第19図-25	9D-32	0002	ピエスエスキュー													16.4	20.5	9.1	3.55	チャート②		攪乱	42.69	
	9D-32	0003	礫片																			攪乱	42.633	混入の可能性有り
	9D-32	0004	砕片													8.7	8.7	8.6	0.54	チャート②		攪乱	42.77	
	9D-32	0005	砕片													9.3	14.3	5.1	0.72	チャート②		攪乱	42.682	
第19図-24	9D-33	0001	ピエスエスキュー																					



## 第2節 縄文時代

### 1 概要

今回の確認調査された範囲からは縄文時代に関連した遺構等は検出されなかった。遺物については図示可能な資料は石鏃1点のみであったが、一括資料の中に縄文時代中期の阿玉台式土器の細片が散見されたため将来隣接地域で当該時期の遺構の検出できる可能性はある。ただし、近年盛んに行われている機械による天地返し等によりすでに消失している可能性も否定できない。

### 2 遺物（第19図1）

1は乳白色に近い色調の珪質頁岩製の石鏃で身の部分が一部欠損している。全長2.9cm，幅2.2cm，厚み0.4cm，重量3.7gである。

## 第3節 古墳時代～中・近世

### 1 概要

今回の調査は1,899.84㎡の調査対象区域の10%の確認調査を行い遺構確認された場所を中心に調査を行う予定であったが、上層は畑のトレンチ等攪乱のため消失していると思われ、遺構確認は不可能であった。トレンチの覆土一括遺物の中から若干の土師器破片，須恵器破片が検出された。実測可能な破片は以下の4点のみである。なお，中・近世の遺物は土鍋，焙烙の口縁部の破片，陶磁器破片が十数点検出された。いずれも近世初頭～江戸末にかけてのものと思われる。

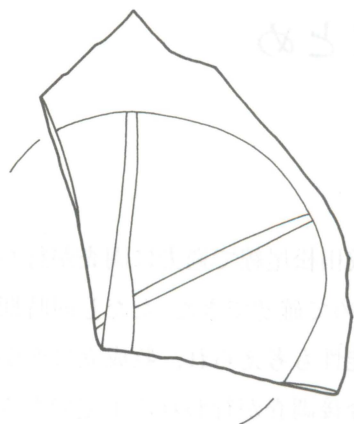
### 2 遺物（第20図1～4）

1は7Cグリッド一括検出の須恵器の杯の底部破片である。底面に窯印のヘラの模様が入っているものである。色調はやや灰色で焼きは非常によい。7世紀～8世紀頃のものと思われる。

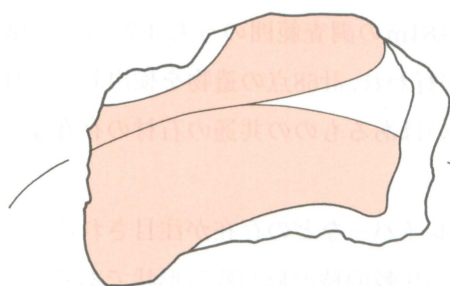
2は7Cグリッド一括検出の土師器の杯の底部破片である。胎土は細かく焼きも良好である。外面底部，底面とも赤彩されている。内面は赤彩の痕跡は認められる。

3は7Cグリッド一括検出の須恵器の杯の底部破片である。外面底面はロクロヘラケズリ，底部はヘラナデで仕上げられている。内面はロクロナデ仕上げである。色調はやや茶色みの強い灰色で焼きはやや不良である。

4は9Dグリッド一括検出の須恵器の甕か甑の胴部の破片である。外面は叩き目を施してある。色調はやや白みがかかった灰色を呈する。



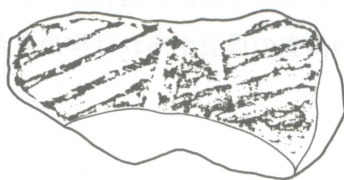
1 7Cグリット一括



2 7Cグリット一括



3 7Cグリット一括



4 9Dグリット一括



第20図 宝馬遺跡93-77地点古墳時代～中・近世出土遺物実測図

## 第4章 まとめ

### 第1節 大里所在馬土手

今回調査された大里所在馬土手はすでに述べたとおり成田松尾線で過去に調査が行われた柳谷遺跡の東側に続く250mを調査して南側に柵列を伴う小さな溝を改めて確認できた。ただし同時期に構築されたものか、そうでないかについては柵列が先行して作られた可能性も考えられ、牧成立にかかわる興味深い問題を提起しているようにも思われる。西側部分についても今後調査が行われる予定であるためそうした部分についても改めて考察できる可能性はあろう。

### 第2節 宝馬遺跡93-77地点

今回調査された宝馬遺跡93-77地点では1,899.84㎡の調査範囲のうち4%の下層確認を行って2か所で遺物が確認された。引き続き530㎡の本調査が行われ、計68点の遺物を検出した。珪質頁岩を主体とする第1地点、チャートを主体とする第2地点と違いはあるものの共通の石材の存在などから同一の文化層と捉えることが可能である。

個別の遺物としては尖頭器、及びエンドスクレイパーなどの存在が注目される。尖頭器は剥片の素材の背面側を細かく中程まで調整を行っているものの比較的稜の形が残る形状である。主剥離面側の調整は基部側から胴部中央くらいまでで全面にはおよんでいない。横断面の形状も台形状になる。技術的にはナイフ形石器の刃つぶし的な処理に近いものと思われどちらかという古いタイプの尖頭器といえることができる。

また、エンドスクレイパーや尖頭器などの石器は残りの石核よりも大きいため同一の石材であるけれどもこの地点に持ち込まれた時点では製品として機能していたものと考えられる。この地点ではより小さな剥片を剥離することが行われており、残された剥片類からもそのことが想像される。

今回の調査区では運良く旧石器時代Ⅲ層下部に相当する文化層の石器群を2か所で捉えることができたが、遺物の分布状況をみればかならずしも全貌を捉えているとは言い難い。石核などの大形の石器剥片は比較的捕捉されたと思えるが、碎片類など小さな石器はおそらくかなりの数量が消失してしまっているのではないかとと思われる。

上層の遺構については今回の調査区では検出されなかったが、遺物等の存在から縄文時代、古墳時代～奈良・平安時代の住居跡なども今後の周辺地域の調査の機会があれば検出される可能性は非常に高い。

# 写 真 图 版



大里所在馬土手周辺航空写真 1万分の1 (昭和55年度)





馬土手A区全景



馬土手A区  
トレンチセクション



馬土手A区  
トレンチ内出土柵列





馬土手B区全景



馬土手B区  
トレンチセクション



馬土手A-2  
拡張区内出土柵列



馬土手C区全景



馬土手C区  
トレンチセクション



馬土手B-1  
拡張区内出土柵列





馬土手D区全景



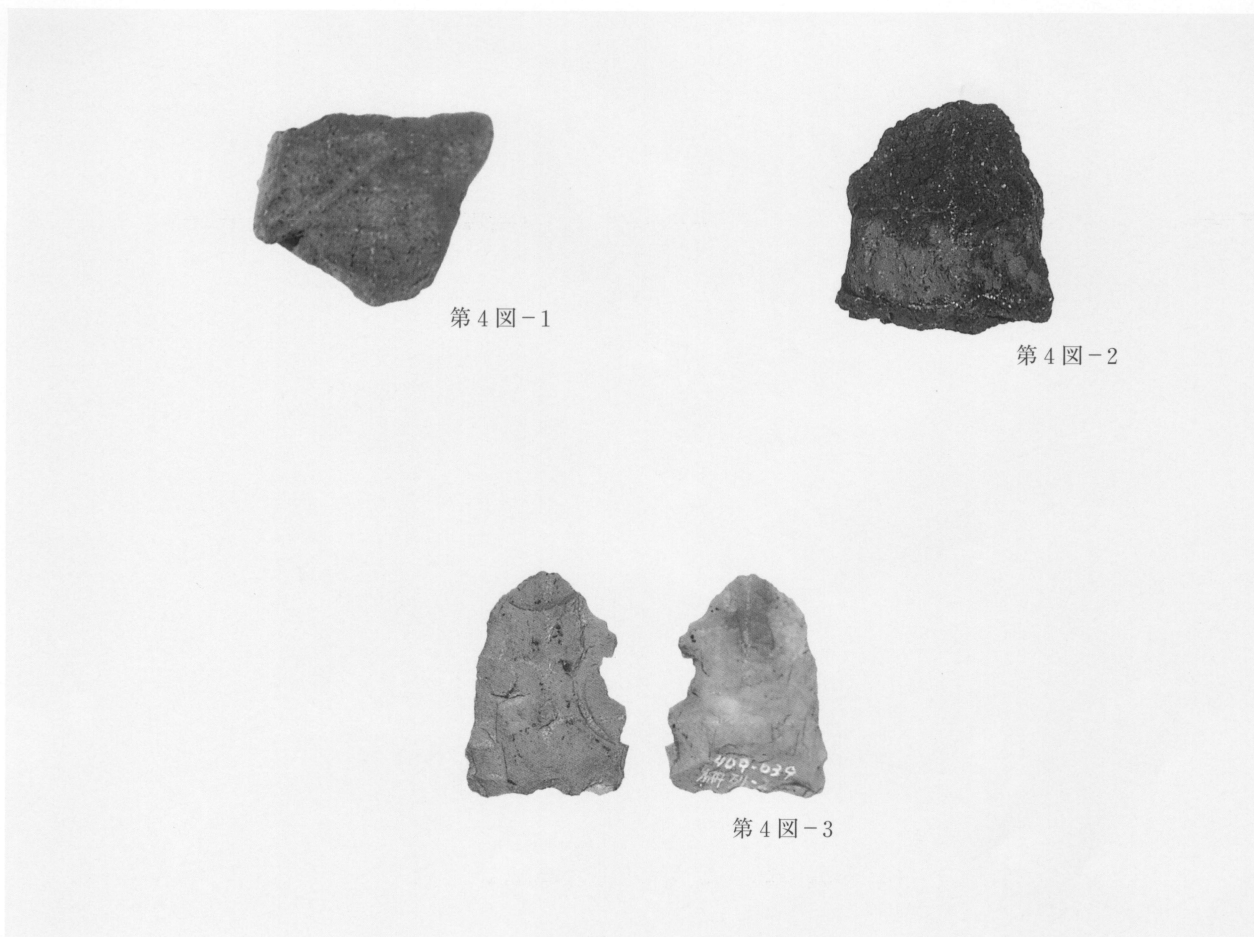
馬土手D区  
トレンチセクション



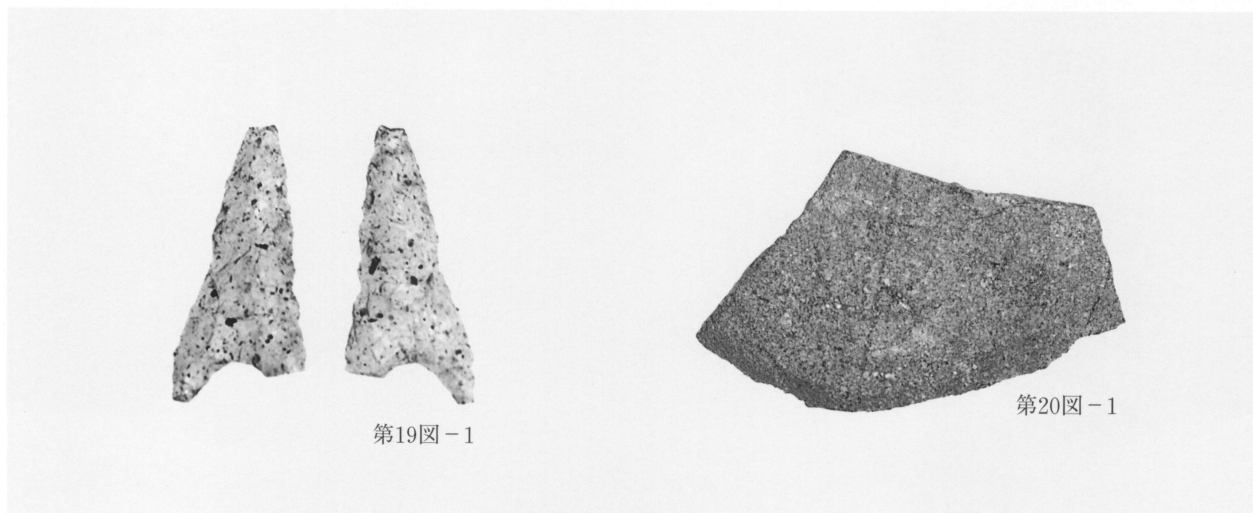
馬土手E区全景



馬土手E区  
トレンチセクション



大里所在馬土手出土遺物



宝馬遺跡93-77地点出土遺物





宝馬遺跡93-77地点周辺航空写真1万分の1（昭和55年度）





遺跡遠景



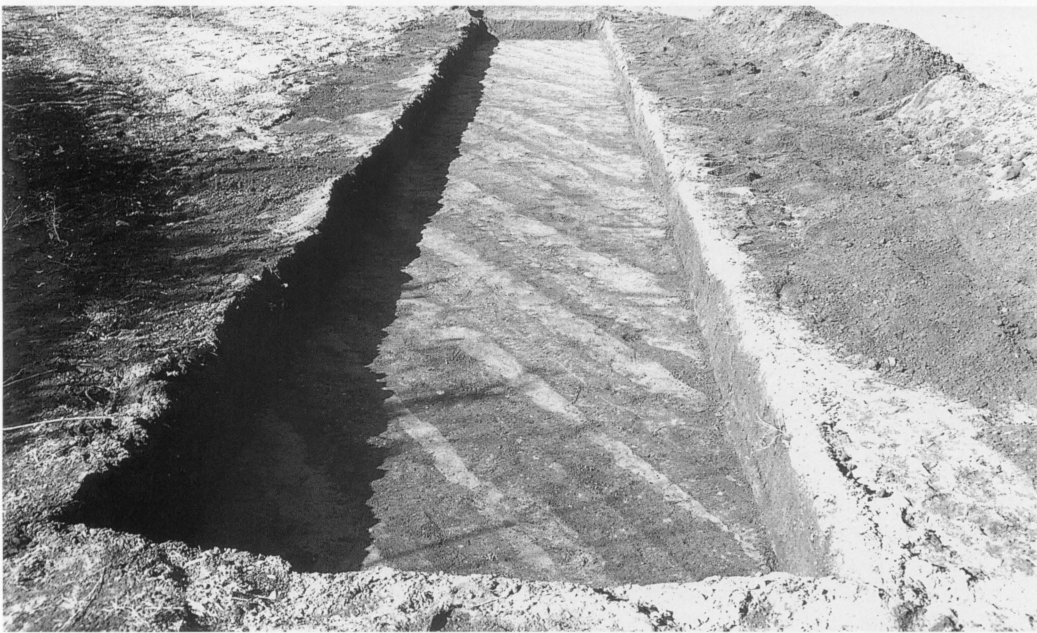
確認調査状況



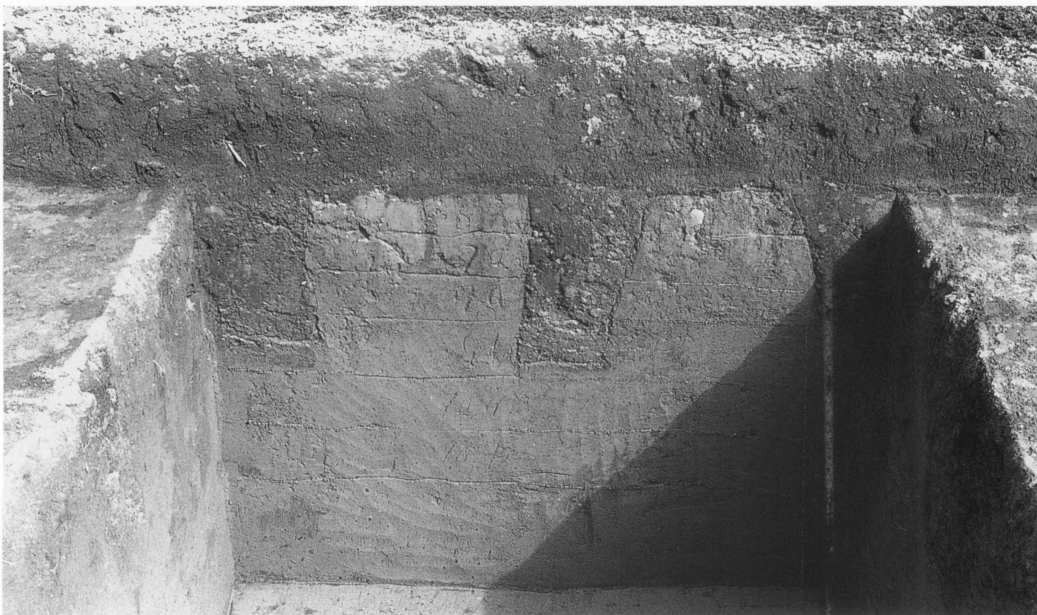
本調査状況



7C区確認トレンチ



9D区確認トレンチ



9D区土層断面





遺物集中第1地点  
出土状況（南から）



遺物集中第1地点  
土層断面（西側）



遺物集中第1地点  
尖頭器出土状況



遺物集中第2地点  
出土状況（南から）

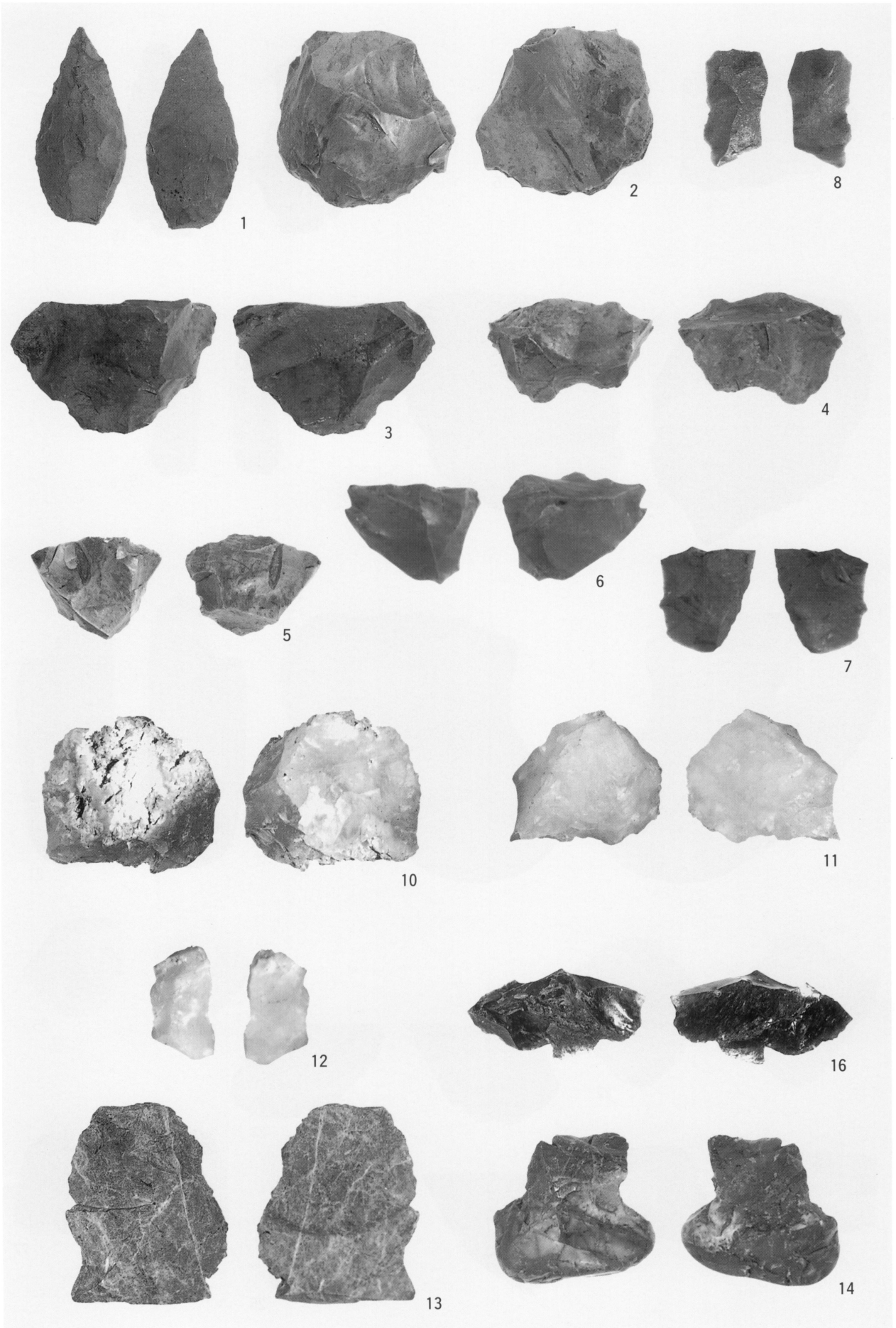


遺物集中第2地点  
土層断面（西側）

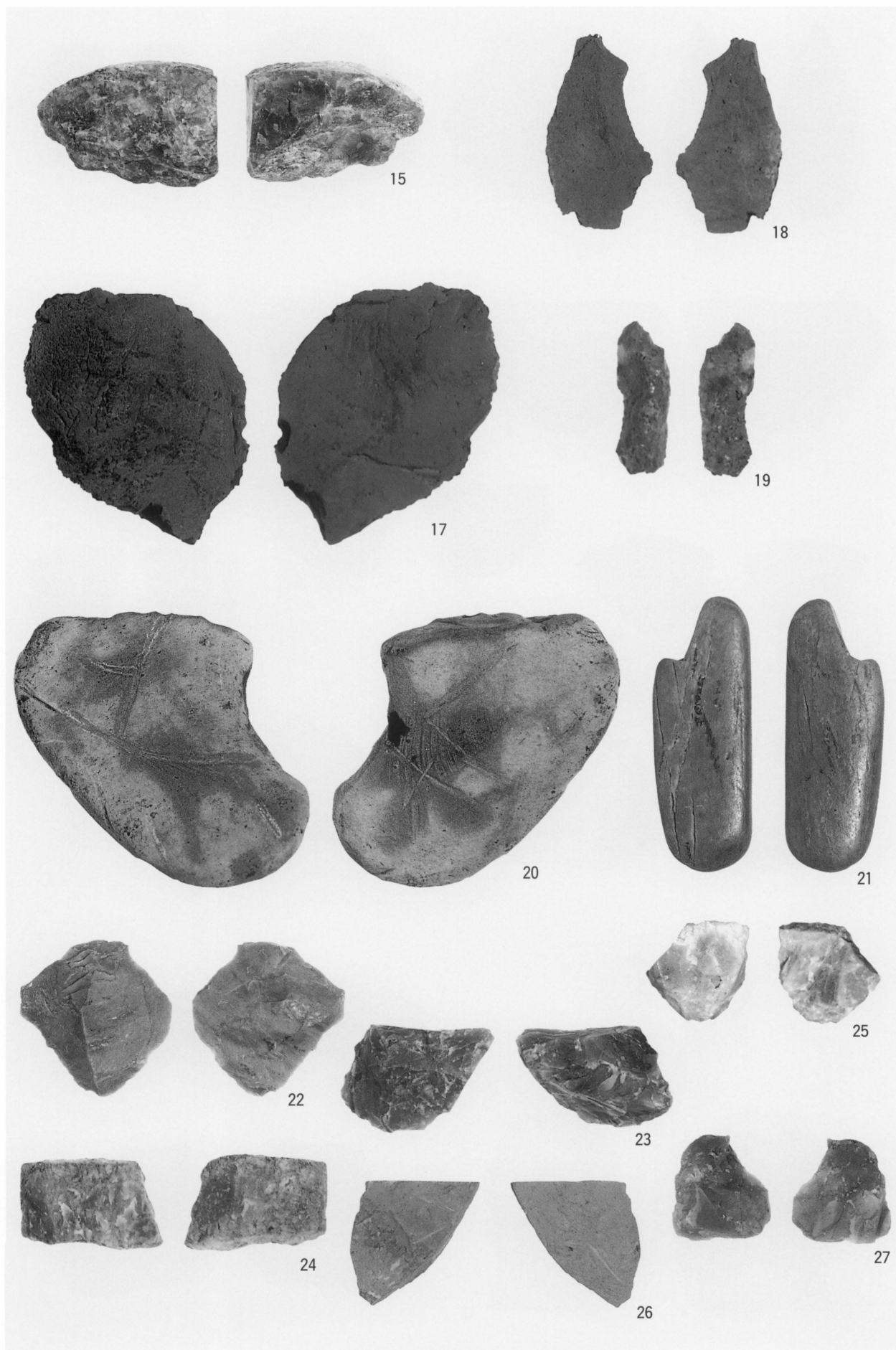


遺物集中第2地点  
縄文時代石鏃出土状況





旧石器時代 遺物集中第1地点出土石器



旧石器時代 遺物集中第1, 2地点出土石器



報告書抄録

ふりがな	しゅようちほうどうなりたまつおせんじゅうろく
書名	主要地方道成田松尾線 XVI
副書名	- 芝山町大里所在馬土手・宝馬遺跡93-77地点 -
巻次	
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第455集
編著者名	西口徹・遠藤治雄
編集機関	財団法人千葉県文化財センター
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2 TEL043-422-8811
発行年月日	西暦2003年3月25日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおさとしよざうまどて 大里所在馬土手	ちばけんさんぶくんしば 千葉県山武郡芝 やままちおおさとあざやなぎやつ 山町大里字柳谷 32-9ほか	409	039	35度 44分 50秒	140度 24分 30秒	20020901～ 20020930	1,250	道路建設
ほうまいせき 宝馬遺跡93-7 ちてん 地点	ちばけんさんぶくんしば 千葉県山武郡芝 やままちほうまあざほうま 山町宝馬字宝馬 93-77ほか	409	035-3	35度 43分 00秒	140度 24分 10秒	20030203～ 20030228	1,900	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大里所在馬土手	馬土手	中・近世 縄文時代	馬土手1条, 250m 柵列1条	石鏃, 土器片(早期)	馬土手に並行して 柵列が検出された。
宝馬遺跡93-77 地点	包蔵地  包蔵地	旧石器時代  縄文時代 奈良～平安 中・近世	石器集中地点2か所	尖頭器, スクレイ パー, 石核, ピエス エスキーユ, 剥片 土器片(中期), 石鏃 須恵器片, 土師器片 土鍋, 焙烙片, 陶磁 器片	尖頭器やスクレイ パー等の石器を含 む旧石器時代の石 器集中地点が2か 所で検出された。

千葉県文化財センター調査報告第455集

主要地方道成田松尾線 XVI

—芝山町大里所在馬土手・宝馬遺跡93-77地点—

---

---

平成15年 3月25日発行

編 集 財団法人 千葉県文化財センター

発 行 千 葉 県 土 木 部  
千葉県中央区市場町1-1

財団法人 千葉県文化財センター  
四街道市鹿渡809-2

印 刷 株式会社 正 文 社  
千葉県中央区都町 1-10-6

---

---